

42285

教科書文庫

4
810
42-1931
2000301841

S6 1931

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

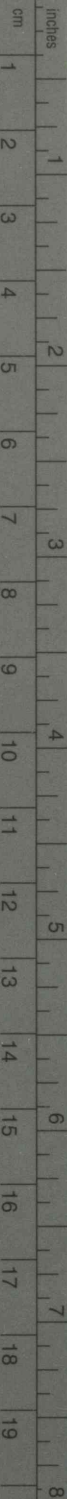


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Ka9
資料室

女子國文新編
第二版
卷七



375.9
Ka9

資料室

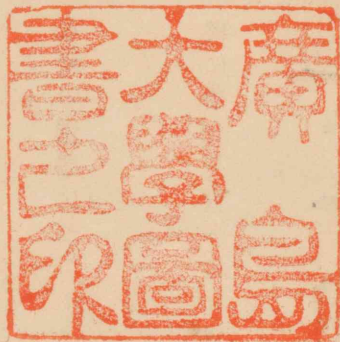
文部省檢定
高等女子學校國語教科書
昭和六年二月二十日

女子國文新編

第二版

東京高等師範學校教授
垣內松三編

女子國文新編



- 一 國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。
- 二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。
- 三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。
- 四 右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

目次 (卷七)

一 文學と人生……………小泉八雲……………四

二 木 精……………森 鷗外……………三

三 汽車に乗りて……………上 田 敏……………三

四 近世の和歌……………佐々木信綱……………三

五 俳人蕪村……………正岡子規……………三

六 貫之と西行……………五十嵐 力……………四

七 古歌の鑑賞……………武田祐吉……………四

八 歌謠に就いて……………高野辰之……………五

九 落花の雪……………(太 平 記)……………六

一〇 流泉啄木……………(今昔物語)……………七

一一 有王島下り……………(平家物語)……………七

一二 反省する心……………土居光知……………七

一三 七寶の柱……………泉 鏡花……………八

一四 鹽 原……………尾崎紅葉……………九

一五 飛行機より……………鈴木文史朗……………一六

一六 十訓抄選……………(十 訓 抄)……………三

一七 批評論……………大 西 祝……………三

一八 恩讐の彼方に……………菊 池 寛……………一

附録 文學形態分類書目

一 文學と人生

一 文學と人生

批評家の中で最も勝れたものは公衆である。一日や一代の公衆ではなく、幾世紀に亙る大公衆である。時といふ厳刻な試験に通過した一國民乃至人類の輿論である。眞の名聲といふものは、所謂批評家によつて作られるものではない。幾百年間の人類の意見の蓄積によるのである。それは洗煉された批評家の意見のやうに鋭くもなく、明瞭でもない。しかもこれほど確かな判断はないといふのは、それが非常に廣大な經驗の結晶だからである。



挿繪 小泉八雲。

書物の價値は、それを一度讀んで満足するか、更に繰返し

〔注意〕附録 日本文學形態圖表參照。



て讀みたくなるかで定まる。眞の良書は、最初讀んだ時よりも二度目には一層心が惹かれ、讀返す度に新しい意義と美とを見出すものである。教養あり趣味ある人が、二度と讀む氣にならないやうな書物は、大したものではない。假令千萬の讀者に購はれようとも、二度と讀まれないやうな書物は、淺薄なものか、まやかしのものかである。併し又、一個人の判断を絶對に間違ひないものと考へる譯にも行かない。一流の批評家にも往々鑑識の鈍りも曇りもある。たゞ累代の公衆の判断に至つては、疑の餘地がない。一讀しただけでは、何處がよいとも思へないやうでも、數百年來名著とされて來た書物には、きつと成程と思はれる處がある。時の試験に合格した、このやうな大傑作だけが、眞に藏書とするにふさはしいものである。

ホル曰く「再度以上讀破することを欲せざる書は讀むことなかれ。」

エマアスン曰く「有名ならぬものは讀むことなかれ。」又曰く「一年を経ざる著作は讀むことなかれ。」

まやかしの 紛らかし欺けるもの。ごまかしもの。

「二度以上讀みたいと思ふ書物だけを買へ。それ以外のものは、特別の理由がない限り買はないがよい。」これが書物選擇の標準である。

かういふ大傑作に含まれてゐる價値は普遍的なものである。大傑作は直ちに青年に感動を與へるものではない。初はたゞ表面の意味や筋が面白いだけであるが、讀者が人生の經驗を積むに従つて、次第にその書の新しい意味が見えて來るものである。十八の時面白いと思つたものは、二十五では一層面白い。三十になつては全然新しい書物に見え、四十にしては、何故今までこれ程の美しさが分らなかつたかと驚く。五十、六十になつても同じ様なことが繰返される。傑れた書物は讀者の心の成長に伴なつて成長する。シェイクスピアや、ダンテや、ゲーテの作物の偉さは、實にこゝにある。

シェイクスピア Shakespeare
pour 1564—1616) 英國
の劇詩人。
ダンテ Dante (12 5—
1321) イタリアの詩人。
ゲーテ Goethe (1749—
1832) 獨逸の詩人・戯曲
作者。

これについて、ゲーテにはよい例がある。彼は短篇の物語をいくつも書いたが、子供にはそれがお伽噺のやうに面白かつた。青年には嚴肅な讀物となつた。中年の者はその中の一字一句にも非常に深い意味を悟り、老人はそこに全世界の哲學と人間の智慧とを見出した。つまり讀者の頭が勝れてゐれば、あるだけ、人生を知つてゐれば、あるだけ、作者の偉さが分るのである。

が、これは作者が自分の作品のもつてゐる廣さや、深さを承知して書いたものではない。勝れた天分は、自ら偉大だなどとはつゆ知らずに、無意識に働くものである。そして作者の天分が大なれば大なるほど、それを自覺する機會は少ない。なぜなら、偉大な天分ほど公衆は理解するのに長年月を要するからである。

「全世界の哲學と人間の智慧」(第二課「木精」参照)

何千年の昔アラビアの或漂浪者が夜空の星を眺め、人間と、この世を作つた見えざるものとの關係に心を打たれて、その心情を歌つたものが、今なほヨブ記の中に傳はつてゐる。爾來天文學の進歩は、我々に三千萬の太陽があつて、それには各若干の遊星があるであらうことを教へてゐる。現在の望遠鏡では約三億の他の世界が見える。恐らく是等の世界の内には、智的生物の棲んでゐるのも多からう。火星には我々の文明よりも更に進んだ文明があるといふ證明さへ得られさうである。我々の宇宙の概念とヨブのそれとは、實に霄壤の相違である。しかも、その單純な詩は、それがために一毫もその美と價値とを失はないのみならず新しい天文學上の發見のある毎に、ヨブの言葉は我々の記憶に新たになる。これはたゞ彼が勝れた詩人で、三千年の古人の心に宿

ヨブ記 舊約全書中の一篇。舊約全書はキリスト降誕以前の記事を集めし猶太民族及び基督教の聖經。三十九篇あり、その内容は、法律・歴史・詩歌・豫言の四部に分たる。

つた眞理をさながらに語つてゐるからである。

アンデルゼンは、道徳的眞理や人生の悟は短いお伽噺や童話で教へるに限るといふ考から、古い話を元にして澤山の新しい面白い話を作つた。その書が今日ではどこの圖書館にも備へつけられ、子供よりも大人に讀まれる方が多い。その中に人魚の話がある。一體人魚などといふものはあるものではない。見やうによつては馬鹿げた話であるが、この話の中に現れてゐる無私・愛・忠誠の感情は不滅である。讀者はその美に打たれて、話の筋の架空なことなどは忘れて了つて、たゞ永遠の眞理を見るのである。

かういふ傑作の中から、自分の爲には何を選定したらよいであらうか。先年英國の科學者ラボックが世界名著百篇を表にしたことがあつた。それを或書肆が廉價本にして出

アンデルゼン Andersen (1833-1875) デンマークの小説家・詩人。お伽噺作家として名あり。

ラボック Lambcock (1803-1865) イギリスの科學者・政治家。

版した。すると、他の文學者にも、之に倣つて各、信ずる處に従つて、他の百の名著を選出するものが出た。それからもう大分時が経つて、この企は何の役にも立たなかつたことが分つて來た。この叢書を購つた人は多いだらうが、讀んだ人は殆どない。これはラポックの選擇が悪いのではなく、一人の人が、銘々異なつた心をもつてゐる多數の人の讀書の課程を決めるといふことが、無理だからである。ラポックは自分に最も感銘の深かつた書物を舉げたに過ぎない。他の文學者がやつたら、さつと彼のとは違つた表を作つたらうと思ふ。書物の選定は、如何なる場合にも個人的でなければならぬ。約言すれば、諸子は自分の眼によつて、自分で選定しなければならぬのである。自分の性格を知りつくし、それに十分の同情をもつてゐてくれない限り、他人に自分の天分

エマアスン曰く「嗜好に適合せるものは讀むことなかられ。」

が奈邊にあるかを定めて貰ふわけにはゆかない。併し、こゝに一つ容易に出来ることがある。それは先づ第一に、今までどんな題目が一番自分に氣に入つたかを決定することである。第二に、その題目のものでは何が一番良いかを決定し、次には、同じ題目を取扱つてゐると稱してはゐるが、未だ大批評家や大公衆に定評のない場あたりのものを除外して、最良のものに没頭することである。しかし、さういふ定評のある書物は澤山にあるものではない。凡て、大宗教の教理を書いた經典は、文學的にも第一級に位するものである。それは彫琢に彫琢を重ねて、その國語では出來得る限り立派なものに仕上げてあるからである。諸民族の理想を表現した敘事詩も亦、第一級に價する。第三には人生の反映としての戯曲の傑作も、最高の文學に入れてよい。併し、優秀なものは

エマアスン曰く「書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらば群書の涉獵に記憶力を徒費することなかられ。」

經典（第八卷第一七課「世界の四聖」参照）

敘事詩 作者自身の感想・議論を露出せずして、自然・事件・性格を客觀的に叙述したる詩。更に廣義

ダイヤモンドのやうなもので、ざらにあるものではない。最後に私は年若い讀者に、陳腐ではあるが、非常にすぐれた格言を繰返したいと思ふ。それは、新刊書の出版を聞く毎に古い書を読み、「といふことである。」(小泉八雲の文による)

夏の日の暮れ難きをも知らず、冬の夜の長きをも覺えぬは、書見る心の樂しさになむありける。さるは道々しき筋のは更なり、家に記せる何くれの書、又假初の筆ずさびなど、唐大和、古今といと様々多かる中に、わが立てたる筋ならぬも、見もてゆくまゝにはえうある事どもありて、かにかくにあかず面白く樂しきは書にしくもの又無かりけり、遠き世のを見る程は、我もその世にある心地して、やがてその人々を友となして、打語らふ心地さへせらるゝを、我も筆とりてよしなしごとども書きつくるが、偶、もちりぼひ残りて、後の人はた我を友とせむには、千年の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。萬づの心やれるわざ、いとさはなれど、唯一人居てあかず樂しきは、書の他に又何かはあらむ。あるが、上にもあらまほしきは書なりけり。(福園文集)

にはかゝる題材を描寫せる敘事的文學一般。戯曲の構成は敘事詩の基礎に立つ。しかも作中の人物の科白は抒情思惟的要素を含み、又舞臺藝術としては種々の藝術的要素を攝取せる綜合藝術なり。

小泉八雲 英國人。ラフカディオ・ハーン。Lafcadio Hearn (1850-1904) 我が國に歸化して小泉八雲と改む。元東京帝國大學教師。明治三十七年歿、年五十五。

福園文集 二篇 中島廣足の家集にて、和文の隨筆なり。

二 木 精

巖が屏風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見つけて喜ぶのは、こゝの谷間である。フランツはいつもこゝへ來てハルロオと呼ぶ。麻のやうなブロンドな頭を振立てて、高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまつて、じいつとして待つてゐる。暫くすると、大きい鈍い最低音で、ハルロオと答へる。

これが木精である。フランツはなんにも知らない。只暖かい野の朝、雲雀が飛立つて鳴くやうに、冷たい叢の夕、蟋蟀こしむらが忍びやかに鳴くやうに、こゝへ來てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へ

木精 こだま。

深山薄雪草 菊科。山地に生ず。高さ約〇・三米。

フランツ Franz.

ハルロオ Hallo. 叫び聲。

ブロンド Blond. 金髪。

高音 Sopran. Soprano.

「じいつとして待つてゐる」

最低音 コントラルバス。

Contrabass.

てくれるのが嬉しい。木精に答へて貰ふために呼ぶのではない。呼べば答へるのが當り前である。日の明るく照つてゐる處に立つてゐれば影が地に落ちる。地に影を落すために立つてゐるのではない。立つてゐれば影がさすのが當り前である。そして其の當り前の事が嬉しいのである。

フランツは父が麓の町から始めて小さい杓を買つて来て穿かせてくれた時から、こゝへ来てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答へないことはない。

フランツはだん／＼大きくなつた。そして父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間、例の巖の前へ來ずゐた。

或日の朝である。山を一面に包んでゐた雪が巖にだけ残つて、方々の樅の木立が緑の色を現して、深い深い谷川の底

を水がごう／＼と鳴つて流れる頃の事である。フランツは久し振で例の巖の前に來た。

そして例のやうにハルロオと呼んだ。麻のやうなブロンドな頭を振立てて呼んだ。併し聲は少し「さび」を帯びた次高音になつてゐるのである。

呼んでしまつて、じいつとして待つてゐる。暫くして、もう木精が答へる頃だと思ふのに、山はひっそりして、なんにも聞えない。只深い深い谷川がごう／＼と鳴つてゐるばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くじいつとして待つてゐた。

木精はやはり答へない。

次高音 アルト・Alto.

「じいつとして待つてゐる」

「じいつとして待つてゐた」

フランツはじいつとして、いつまでも待つてゐる。
木精はいつまでも答へない。

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈はない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなか



つたのではないかと思つた。
フランツは前より大きい
聲をしてハルロオと呼んだ。
そして又じいつとして待
つてゐる。

もう答へる筈だと思ふ時
間が立つ。山はひつそりして

ゐて、ごう／＼といふ谷川の音がするばかりである。
又前に待つたほどの時間が立つ。

「又じいつとして待つてゐる」

聞えるものは谷川の音ばかりである。

これまでは、フランツは唯不思議だ不思議だと思つてゐたばかりであつたが、此の時になつて、急に何とも言へないほど心細く寂しくなつた。譬へばこれまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの頭に觸れたのである。フランツは麻のやうなブロンドな髪が一本々々逆に立つやうな心持がして、何を見るときもなしに身の周りを見廻した。目に觸れるほどのものに、何の變つた事もない。目の前には例の巖が屏風のように立つてゐる。日の光がところ／＼霧の幕を穿つて、縦の木立を現してゐる。風の少しも無い日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えてゐた縦の木立が又隠れる。谷川の音

「何とも言へないほど心細く寂しくなつた」

麻痺 感覚を失ふこと。

の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛の頸に懸けてある鈴であらう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいつと考へてゐる。餘り不思議なので、夢ではないかと思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。

暫くしてフランツは、何か思ひ附いたといふやうな風で、「木精は死んだのだ」と呟いた。そしてぼんやり自分の住んでゐる村の方へ引返した。

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精のことが氣に掛つてならないので、又例の巖の處へ出掛けた。

此の日丁度、午過ぎから極く軽い風が吹いて、高い處にも低い處にも團まがつてゐた雲が、少しづつ動き出した。そして銀色に光る山の巖が一つ見えて來た。フランツが二度目に

「氣に掛つてならないので」

出掛けた頃には巖といふ巖が、藍色に晴れ渡つた空にはつきりと描かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帯びた紅に匂ふのである。

フランツが例の巖の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑やかに聞えた。小さい時から聞馴れた、大きい鈍い最低音の木精の聲である。

フランツは「おや、木精だ」と、覺えず耳を敬てた。

そして何を考へる隙もなく駈出した。例の巖の處に子供が集つてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリューネットな髪をしてゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。

フランツはつひに見たことのない子供の群を見て、氣兼をして立止つた。

子供達は皆じいつとして木精を聞いてゐたのであるが、

ブリューネット Brunett.
帶黒色。

木精の聲が止んで了ふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。勇ましい底力のある聲である。

暫くすると、木精が答へた。大きい大きい聲である。山々に響き、谷々に響く。

空に聳えてゐる山々の巔は、此の時あざやかな紅に染る。そしてあちこちにある樅の木立は、次第に濃くなる鼠色に浸されて行く。

知らぬ七人の子供達は皆じいつとして、木精の聲尻が微かになつて消えて了ふまで聞いてゐる。どの子の顔にも喜の色が輝いてゐる。其の色は生の色である。

群を離れて矢張りじいつとして聞いてゐるフランツの顔にも喜びが閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

フランツは何と思つてか、そのまゝ踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんな事を考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達がそこに住んでゐるといふことだ。あれは大方その村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないので、木精が死んだかと思つたのは間違ひであつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。今度呼んで見たら答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とう／＼闇に包まれてしまつた。村の家にはちらほら燈火がつき始めた。(森 鷗外の文による)

「そのまゝ踵を旋らし
て」

「自分は呼ぶことは廢
さう」

「村の家にちらほら燈
火がつき始めた」

森 鷗外 名は林太郎。文
學博士。醫學博士。大正十
一年歿、年六十三。

三 汽車に乗りて

赤松の林をあとに、
麻島ひだりに見つゝ、
汽車はいま堤にかゝる。
ほのかなる水のにほひに、
河淀の近きは著し。

三稜草生ふる河原に、
葦切はけしと噪ぎ、
鶺鴒こそ夏は來らね、
たま〜に百舌の速贄、
篋鷺の何をか思ふ、



赤松の林を
あとに

三稜草 水邊に生ずる多年生の草。葉は細長く二三尺に達し、夏秋の候、葉間に三稜形の莖を生ず。花は白色。

鶺鴒 はくてもうの異名。百舌の速贄 百舌が夏の頃蛙・小鳥などを捕へ、木の枝に貫きおくをいふ。篋鷺 涉禽類の一種。形は通常の鷺の如く、冠毛は無し。嘴の長さ五寸許り、嘴端は廣くして篋の如し。羽毛は暗灰色。

しよんぼりと立てる暇に。

紡績の宿にやあらん、

きりはたりはたり、ちやうちやう。

箴の音やゝにへだたり、

道祖神祭るあたりの

鐵道の踏切近く、

繩帶の檻褸の衣、

褐色は飾磨の染の

乳呑子を負へる少女は、

淺茅生の末黒に立ちて、

萬歳と囃し送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ、

道祖神 路上の惡魔を防ぎ
て行人を守る神。みちの
かみ。手向の神。

飾磨の染 播磨國飾磨郡印
南より出す染色。紺の濃
きもの。

淺茅生 茅のまばらに生え
たるところ。

末黒 春の燒野の芒の葉先
の黒きこと。こゝは淺茅
生の末黒とつゞけて見
る。

幾年を生きよ、里の子
 人の世に尊きものは
 土の香ぞ、國の御魂ぞ。
 偽の市に住まへば、
 産土の神に離りて、
 養を缺きたる人も、
 埴安の郷の土より
 生えぬきのなれに呼ばれて、
 本然の命にかへる。
 道芝の上吹く風よ、
 農人の寢覺に通ふ
 微かなる土のおとづれ、

埴安 埴安は、もと地名なるも、こゝにては殆ど枕詞の如く用ひられたり。
本然の命 人間の本性として持つ、何の偽も飾りもなき、ありの儘の生命。

なつかしき母の聲音か。
 晝さがり草の香高く、
 松脂のにはひもまじる
 地の胸の乳房のかをり、
 蘇門答刺の香も及ばじ。
 忽ちに鐵のにはひす。
 鳴神の落ちかゝること、
 汽車は今橋に轟く。
 桁構へ、眼路をかぎりて、
 ひとり見る蛇籠の磔。

(上田 敏)

蘇門答刺 七種の香木の

上田 敏 文學博士。東京の人。東京高等師範學校、京都帝國大學教授たり。大正五年歿、年四十四。

四 近世の和歌

記紀このかた、わが國史を貫通してある二千餘年間の和歌史の中には、前に萬葉古今新古今を生じた長い時代があり、後に年月こそ短かけれ、極めて注目すべき現象を生じた明治の革新時代がある。その間に於て、前者の古典時代に對しては復興的意義を有し、後者の革新時代に對してはその前驅とも見るべき、所謂近世時代が介在するのである。

徳川の天下も元和偃武から打續く太平の餘澤に、文化も著しく進歩した。その初期にあつては、歌壇は依然として古今傳授の祕説を重んじ、舊態を墨守してゐたが、元祿の頃に及ぶと、漸く堂上の歌風に嫌らずして、大いにその弊風を論じ、自ら清新の詠作を試みるものが現れるに至つた。その先

記紀 古事記・日本書紀の略稱。
萬葉 萬葉集。
古今 古今和歌集。
新古今 新古今和歌集。

近世時代 國史にては徳川家康の征夷大將軍に拜せられしより明治維新に至るまでを指せど、文學史には元祿以降を呼ぶ。
元和 後水尾天皇の御代。(二二七五—二二八三)
古今傳授 古今和歌集の中の難解なる語の解釋を祕傳として、授くること。
元祿 東山天皇の御代。(二二四八—二二六三)
堂上の歌風 飛鳥井雅章・武者小路實岳・冷泉爲村等あり。

驅は、下河邊長流僧契沖・戸田茂睡等である。長流と契沖とは共に深い古學の根底を有して居る。而して、長流は放逸で詩人肌であつたから、想像の饒かなものがあり、契沖は謹厚な學者で、整齊優雅の作が多い。茂睡が梨本集を著はして、堂上歌風を駁撃し、大いに歌道の革新を叫んだのは元祿十一年



であつた。

この三

家に稍後れて古學復興の機運の發展を代表して現れたのは、荷田春滿の門人、賀茂眞淵である。眞淵は不世出の大才を以て深く古學に詣り、殊に萬葉集を究めてその歌風を熱愛し、之を以て作歌の範とすべきことを主張した。又自らその詩人的天分を以て雄渾莊重の秀歌を多く示した。その門下には本居宣長・加藤千蔭・村田春海・楫取魚彦・加藤宇萬伎・田安

下河邊長流 大和の人。貞享三年歿、年六十三。(二二八四—二三四六)
「朝菜つむ野への少女に家とへばぬしだに知らずあとの霞に」
僧契沖 攝津の人。後、大阪の高津に卜居。元祿十四年歿、年六十二。(二二〇〇—二二六二)
花見つゝ分れば淺ししら雲のおくに思ひしみよし野の山 契沖(挿繪)
戸田茂睡 駿河の人。寶永三年歿、年七十八。(二二八九—二二六六)
「のがれかね世にふりはてし老の身は隠れすむべき山梨のもと」
荷田春滿 伏見稻荷祠官の子。天文元年歿、年六十九。(二二二八—二二九六)
「ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは」
賀茂眞淵 縣居と號す。遠江の人。明和六年歿、年七十三。(二二五七—

宗武等があつた。

春満の養子荷田在滿と本居宣長とは各異なる立場から新古今集の歌風を唱道するに至つた。在滿は詠作は少いが、

水 水もをる水もをる水もをる水もをる

その著「國歌八論」によつ

て、歌壇に賛否の論議の渦を捲き起した。宣長は學者としてはその師に勝るものであるが、詩的天分に至つては遠く及ばなかつたのである。

縣居門下に歌を以て鳴るものは加藤千蔭である。その師の説に泥まず、一向、良き歌を求めたことは、化政度の江戸泰平の風にはぐくまれて、寧ろ萬葉調を離れて古今を宗とし、自ら清新なる一體を成し、村田春海と共に江戸派と稱せられ、優麗を以て聞えた。

二四二九

「信濃なる菅の荒野を飛ぶ鶯のつばさもたわに吹く風かな」

本居宣長 鈴の屋と號す。

伊勢の人。享和元年歿、年七十二。(二三九〇—二四六一)

「雉子なくこせの春野のつぼすみれつみてを行かん日は暮れぬとも」

加藤千蔭 芳宜園と號す。

江戸の人。文化五年歿、年七十五。(二三九四—二四六八)

「墨田川養きてくだす伎士にかすむあしたの雨をこそ知れ」

村田春海 琴後翁と號す。

江戸の人。文化八年歿、年六十六。(二四〇六—二四七一)

「心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士のれ」

楳取魚彦 下總の人。伊能氏。歌人。天明二年歿、年六十。(二三八三—二四四二)

「ちよみの父いまさずていとせに妻あり子ありその妻あり」

荷田在滿 春満の養嗣子。寶曆元年歿、年四十六。(二三六六—二四二一)

餘寒水

さえかへり春しら波の打出し水のひまに水おにけり

在滿(前頁挿繪)

國歌八論 一卷。寛保二年成る。堂上歌風の積弊を八つに分ちて極論せるもの。

化政度 文化・文政の頃。

小澤蘆庵 尾張の人、京都に住す。冷泉爲村の門人。享和元年歿、年七十九。(二三八三—二四六一)

八月

わたのはちかきりもなみにかいやくてななきわたる秋の月かけ 蘆庵(挿繪)

香川景樹 桂園と號す。桂園派の祖。天保十四年歿、年七十六。(二四〇六—二四七一)

「いづくより駒うち入らん佐保川のさざれにうつる白菊の花」

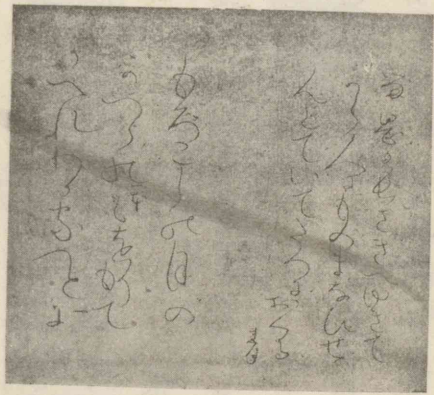
木下幸文 備中の人。亮々舎と號す。文政四年歿、

當時堂上の歌風を汲んだ歌人中、最も傑出して居るのは小澤蘆庵であつて、その歌は無法無師であるべきことを主張したのは一面の卓見である。次いであらはれた鋭才香川景樹もまた擬古を排し、古來の法格と慣習とに泥まず、自ら新作風を示して世の耳目を聳動し、遂に歌壇に覇を唱へるに至つた。その門人中、木下幸文、熊谷直好、八田知紀等最も傑出し、知紀からは高崎正風が出て、明治に及び御歌所長となつたものである。その間に於て、各派の流を汲みながら、しかも特色ある自己の風を詠み出た歌人が各地にあらはれた。即ち、幕末の諸歌人として總括せられるものである。その中には、橘曙覧、大隈言道、平賀元義、太田垣蓮月等の如き専門歌人と、良寛和尚

八月 月のひかりをみれば 雲の影をみれば 雲の影をみれば 雲の影をみれば

の如き世外の人と、數多の勤王諸家の如き、その有する特殊の閱歷の結果として自ら異彩ある歌風を傳へた人とがあつた。

文學史に於て近世の始を元祿時代におくのは、この時代に於て、はじめて自由解放の精神を以て、或は古學の研究に、或は文藝の製作にたづさはる傾向が明かになつて來たからである。和歌に於ても、元祿に入つてはじめて、古學研究の眞精神と共に、鎌倉時代以來の束縛から脱して、古歌風を復興しようといふ精神が生じて來たのである。而して、近世の和歌の發生が、古學の研究に伴なつたことは、近世和歌史に於ける一大特質とし



て、近世の和歌を殆ど終に至るまで規定した。諸歌人によつて試みられたそれらの和歌革新が、どこまでも古歌から脱離し得なかつたのは、之が爲である。併し、かゝる大勢のうちにも、各種の個人的歌風がその間に發揮されて來たのである。

要するに、古歌風の眞精神復興のうちに、眞の自分の歌といふものを詠み出さうといふ運動の流が、近世の和歌史である。而して、この古歌に歸るといふことと、自分の歌を詠まうといふ要求との二つは、多くの場合に於て調和されて居た。蓋し、古へにかへるといふことは、自然にかへること、やがて眞にかへることであると考へられてゐたからである。

(佐々木信綱の文による)

年四十三。(二四三九一)
 二四八一)
 すと打あけて泣かぬ心ぞ
 まこと悲しき
 熊谷直好、岩八の人。文久
 二年歿、年八十一。(二四二二)
 八田知紀、桃園と號す。鹿
 児島藩士。明治六年歿。鹿
 年七十五。桃園と號す。鹿
 一蚊遣火のけぶり花に
 咲きにけりしづが垣根の
 夕顔の花
 高崎正風、鹿兒島の人。男
 爵。福密顧問官。明治四
 十五年歿、年七十七。
 一うち笑みて膝にはひよ
 るかなしきは我が子人の
 子かはらざりけり
 橋本龍、福井の人。志濃夫
 年五十七。明治元年歿。
 二五二八)。(二四七二)
 大隈言、福岡の人。大阪
 七十一。明治五年歿、年
 二五二八)。(二四五八)
 平賀元善、岡山藩士。慶應

元年歿、年六十七。(二四
 五九一)。(二五二五)
 天地の神の盛りおける夢
 飯の山
 太田運、名は誠。京都
 知恩院の女問侍太田垣傳
 右衛門の隠棲して詠歌を
 年に八十五。(明治八年歿、
 五三三)。(二四五一)
 留岡が長さきへゆきてか
 り人にものまなびせんとて
 てたつにおくる蓮月の一
 ももおりもてかへれわが家
 つとに(前頁挿繪)
 長寛和尚、俗名は山本榮
 藏。越後の人。天保二年
 歿、年七十五。(二四一七
 一)。(二四九一)
 一かすみ立つながき春日
 つを子どもらと手繰つきつ
 つこの日くらしつ

佐々木信綱、竹柏園(ナギノソノ)と號す。三重縣の人。文學博士。歌學者。(二五三二)

五 俳人蕪村

意匠の美は文學の根本にして、人を感動せしむるに與つて力あり。然れども用語・句法の美これに伴なはざれば、可惜意匠の美を活動せしめざるのみならず、却つて厭ふべき俗氣を帯びたるが如く感ぜしむることあり。蕪村の用語と句法とは其の意匠を現すに最も適せるものにして、しかもその創造に係るもの多し。

「漢語」は蕪村の喜んで用ひたる所にして、種々の便利ありしに因るべけれど、その國語より簡短なりしに因らずんば、あらず。複雑なる意匠を十數字の中に含めんには、眞に簡短なるものを用ふるの必要あり。

閣カに坐して遠き蛙を聞く夜かな

蕪村 谷口氏。攝津の人。

姓を與謝とも稱せり。夜半亭・紫狐庵等の號あり。天明三年歿、年六十七。(二二七七—二四四三)

蕪村の頃及びその當時の俳風を芭蕉のそれに比すれば、天明調は思想感情は複雑となり、細緻となり、且支那情調的・歴史的・古典趣味の繪畫的なる趣味の加はれるを認め得るなり。その當時の俳人の句。

曉臺(加藤)の句

四五尺の桃花咲きぬ草の中

琴太(大島)の句

世の中は三日見ぬまに櫻かな

白雉(加倉)の句

入こひし火ともしころを散る櫻

関東(高桑)の句

冬籠り史記よむほどの米もあり

三井寺や日は午に逼る若楓

されど濫に漢語を用ひて、爲に一句の調和を缺かば佳句とは言ひ難し。

國語もて言ひ得ざるにはあらねど、漢語を用ひて勢を強くしたる方、善く其の意匠を現すべき場合あり。

五月雨や大河を前に家二軒

絶頂の城たのもしき若葉かな

漢語を用ひていかめしくしたる句、

蚊遣してまゐらす僧の座右かな

賣卜先生木の下閣の訪はれ顔

又支那の成語を用ひたるが爲に興あるもの、又成語を其の儘ならでは用ひるべからざるものあり。支那の人名・地名を用ひ、支那の古事・風景等を詠ずる場合は勿論、我が國の事

本祇(炭)の句

のどかきに無沙汰の神社廻りけり

几董(高井)の句

あくびして月ほめてゐる隣かな

にも引合に出されたるもの少なからず。

易水に葱ながるゝ寒さかな

三徑の十歩に盡きて蓼の花

右の他に、

春水や四條五條の橋の下

の句の如く、春水の「橋の下」と同調なることを避けしものあり。又、

薰風やともしたてかねつ嚴島

の如く、「風薰る」といひては意強きに過ぎて句を成し難し。蓋し燕村の炯眼は早くもこゝに光れり。

古語も亦燕村の好んで用ひたる所なり。漢語は延寶・天和の間に、其角一派が用ひて終に其の調和を得ずして終りしも、燕村に至りて始めて成功を得たり。古語は元祿の頃蕉門

延寶 靈元天皇の年號。(二三三—二三四〇)
天和 同右(二三四—二三四三)
其角 覆木氏。芭蕉門下の俳人。後に江戸座といふ一派を起せり。寶永四年(一七二七)歿。年四十七。(二三二—二三三七)

の人々がその調和を試みて、已に成功したる所、今は燕村に因りて更に一步を進めたり。

命婦より牡丹餅たはす彼岸かな

大高に君しろしめせ今年米

「俗語」の最俗なるものを用ひ始めたるも亦燕村なり。元祿の頃は雅語・俗語相半ばせし俳句も、享保以後、無學無識の徒に翫弄せらるゝに至つて雅語漸くその姿を消し、俗語益々用ひられ、意匠の野卑と相待つて遂に俗俳となり了れり。されど其の俗語たるや、雅語を解せざるが爲に用ひたるものにして、そは俗語中の古に近きものなり。日常の話語に至りては固より用ひざりしのみならず、之を俗として排斥したり。檀林派の作者すら、なほこの俗語中の俗語を用ひたるものを見ず。然るに、之を使ひたる燕村の句は、これが爲に俗に陥

元祿時代 東山天皇の御代(二三三八—二三六三)。
松尾芭蕉・近松門左衛門・井原西鶴等出て、平民文學の隆盛となりたる時代。

享保 中御門天皇の年號(二三七—二三九五)。

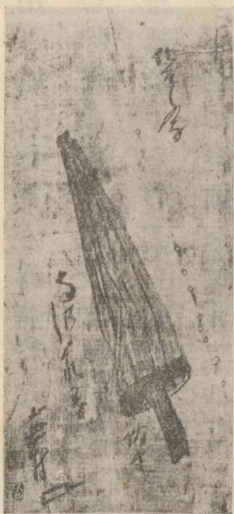
りしことなく、却つて腐草螢と化し、淤泥蓮を生ずるの趣あるを見ては、誰か其の技倆に驚かざらん。

出る杭を打たうとしたりや柳かな

化さうな傘かす寺の時雨かな

蕪村は佶屈なり易き漢語も佶屈ならしめざりき。冗漫なり易き古語も冗漫ならしめざりき。野卑なり易き俗語も野卑ならしめざりき。

實に蕪村は用語に於ても獨歩の人なり。



俳句の句法は貞享・元祿に定まりて、享保・寶曆を経て少しも動かず。たゞ時に檀林派及び鬼貫等の奇を弄するあるのみ。然るに蕪村は句法の上に種々の工夫を試み、或は漢詩的

貞享 靈元天皇の御代（二三四四—二三四七）
寶曆 桃園天皇の御代（二四一一—二四二三）

挿繪 蕪村筆蹟
化さうな傘かす寺の時雨かな 蕪村

檀林派 西山宗因の創めし俳諧の一派にて、滑稽を旨とす。
白露や無分別なる置所 宗因
浮世の月見過しにけり末 西鶴
二年 西鶴
鶯の細腰よりぞこぼれ 才麿

に、或は古文的に、先人の未だ口にせざりし所を吟ぜり。

春風や堤長うして家遠し

菜の花や月は東に日は西に

しのゝめや鶉をのがれたる魚淺し

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

の如きは、漢詩・漢文より來りし句法なり。

陽炎や名も知らぬ蟲の白き飛ぶ

橋なくて日暮れんとする春の水

春の水背戸に田つくらんとぞ思ふ

の如きは、古文・和歌より來りしもの。又その他に、

蚊の聲す忍冬の花散るたびに

水かれく、蓼かあらぬか蕎麥か否かの如きあり。

わがれたる首あげて見る 來山
寒さかな
鬼貫 平泉氏、又、上島氏。
名は治房。攝津國伊丹の人。天文三年歿、年七十八。（二三二—二三九八）
行水のすて所なし蟲の聲

修飾語は句を活動せしめ、かつ印象を明瞭ならしむるに
效多し。蕪村は巧みに之を用ひて、少しも句勢にたるみを生
ぜず。殊に中七音の中にこれを用ふることに長じたり。

手燭して善き薄團出す夜寒かな

眞結びの足袋はしたなき給仕かな

蕪村の句は堅く締りて搖がぬが其の特色なり。故に簡勁
の語多く、冗漫の語少し。然るに彼に一つの癖あり。

つゝ、じ咲きて石うつしたる嬉しさよ

顔白き子のうれしさよ 枕蚊帳

五月雨大井越えたるかしこさよ

の如き是なり。さよといはずば感情を現す能はざる時にの
み用ひたる蕪村の句は、固より此の語を無造作に置きたる
にあらず。更に驚くべきは蕪村が一句の結尾に「に」といふ手

手蕪葉 助辭。

爾葉を用ひたる事なり。

畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に

時鳥平安城をすぢかひに

廣庭の牡丹や天の一方に

庵の月あるじを問へば芋掘りに

狐火や鬮體に雨のたまる夜に

常人をして此の句法に倣はしめば必ずや失敗に終らん。助
辭の結尾を以て一句を操るもの、蕪村の蕪村たる所以なり。
蓋し蕪村は複雑なる意匠を短詩形に盛るには、含蓄多き
漢語を常用し、或は古語を用ひ、或は俗語をも驅りて以て叙
事詩形を精細にすることを痛感せしを以てなり。宜なり、そ
の句の趣味識ひろく、詩的寫象の複雑精緻に、その調の緊縮
して勁健味の多きことは、(正岡子規の文による)

正岡子規 名は常規。俳人・
歌人。松山市の人。俳句・
和歌の革新に功あり。明
治三十五年歿、年三十六。

六貫之と西行

紀貫之は當時の歌壇の先頭に立ち、新しき理想を唱へて歌界の潮風を導いた巨人である。彼が自家の作風について、いかほど自信があつたか、いかに上下の信用と尊敬とを博したかは、古今集に載せられた歌の總數千幾首の中に貫之の作が百首以上であるのを見ても知られる。彼は又、古今集の序文に於て、歌論及び假名評論文の魁をなし、土佐日記に於て日記の魁をなした。彼は種々の點に於て第一人者たるべきものである。

古今集頃の歌人は主として、理窟が立つて内容形式の一致することを求めた。十の思想を十の言葉に現して、用語句作り、音調をあくまでも優美に削り上げて行かうといふの

が、恐らく彼等の理想であつたであらう。この優美主義を短形式の詩歌に用ひて理想に達したのは古今集の頃、同じ主義を長形式の物語に用ひて大成功をなしたのは紫清の頃である。たゞし、貫之の歌をはじめ古今集の頃の歌には、理窟が勝ち過ぎて情を殺すやうな傾があつた。例へば古今集の開卷第一に、

年の内に春は來にけりひととせをこぞとやいはむ
今年とやいはむ(在原元方)

といふのがある。月日の領分争ひが、それだけで詩歌となつて、しかもそれが名歌扱ひをされて、勅撰集の卷頭に据ゑられるといふのは、實に未聞の珍事である。又、

櫻ちる木の下風はさむからで空にしられぬゆき
ぞふりける(紀貫之)

紀貫之 御書所預大内記・土佐守・玄蕃頭・木工權頭に歷任し、天慶九年(一六〇六)延喜五年四月十八日、醍醐天皇の勅を奉じて、紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑と共に古今和歌集二十卷を撰じり。この歌集は、歌を春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・戀・雜・哀傷・雜體(長歌・旋頭歌・誹諧歌)大歌所御歌の部門に分類別載せり。別に貫之の和文の序・紀淑望の漢文の序あり。

土佐日記 一卷。紀貫之が、土佐守の任を終へて、京都に上る時の國文の日記。

貫之の歌

袖ひどて結びし水の氷れ
るを春立つけふの風やと
くらむ
常よりもりまさるかな
山のはの紅葉をわけてい
づる月影
春日野の若菜つみにや白
妙の袖ふりはへて人のゆ
くらむ
あふさかの關の清水にか
げ見えて今やひくらむ望
月のこま
在原元方 業平の孫。

人はいさ心もしらずふるさは花ぞむかしの香
にほひける(同)

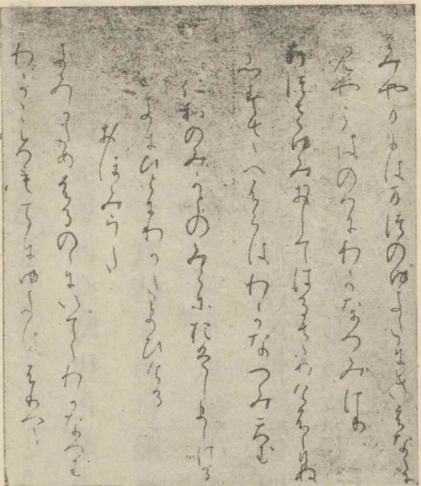
といふのがあるが、調子が整つた所と理窟を面白く立てた所とを除けば、情の上の味ひといふものが殆ど無い。貫之は主知主義を提げて、業平・小町等の主情主義に反対し、而して主知主義の勝利は、大體に於て古今集の歌の情味を乾燥せしめたのである。

古今集以後の歌は、古今の題材用語形式を墨守して、次第に爛熟し墮落して行つた。其の間に多少革新を企てて小波瀾を揚げた者もあつたが、特にいふべきほどの者が無い。又古今以後、次第に事を多くして形式の變化を求め、やうになつて来たが、此の傾向の極端に發達したのが鎌倉初期で、作家では定家歌集では新古今集がこれを代表する。世に古

在原業平 阿保親王の第五子。貞觀の頃右馬頭に任ぜらる。元慶中右近衛中將に進み、ついで相模守・美濃守を兼ね。同四年歿。年五十六。(一四八五—一五四〇)
「千早振る神代もきかず龍田川から紅に水くゝるとは」
小野小町 出羽守小野良貞の女といふ。
「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」
藤原定家 俊成の子。「新古今集」新勅撰集の撰者。仁治二年歿。年八十。
(一八二—一九〇一)
「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」
新古今集 二十卷。建仁元年十一月三日、後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮法師等が撰進せるものなり。

後撰集 二十卷。村上天皇の勅により、大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城等の撰。
拾遺集 二十卷。花山天皇の御撰とも、藤原公任の撰ともいふ。
後拾遺集 二十卷。白河天皇の勅により藤原通俊撰。
金葉集 二十卷。白河上皇の詔により源俊賴撰。
詞花集 二十卷。崇徳上皇の詔により藤原顯輔撰。
挿繪 傳紀貫之筆 高野切。
千載集 二十卷。後白河法皇の詔により藤原俊成撰。
清原元輔 梨壺五人の一。清少納言の父。正暦元年歿。年八十三。(一五六八—一六五〇)
「花薄まれく袂はあまたあれど秋はとまらぬものにぞありける」
大中臣能宣 頼基の子。祭主に任ぜらる。正暦二年歿。年七十。(一五八二—

今集とこれについて撰まれた後撰集と拾遺集とを稱して三代集といひ、なほ此の三代集に後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集及び新古今集を加へて八代集といつてゐるが、此の中、後撰より千載に至る六代歌集及び清原元輔・大中臣能宣・源順・藤原公任・源俊賴・藤原基俊・同顯輔・同清輔・同俊成等の多くの歌人は、畢竟新古今の作風を成さんがため、の下づみになつたやうに見える。而してこの新古今の風尚を最もよく窺ふべきものは定家で、吾等は彼の歌に於て、三十一文字の中に、多くの事柄をこぼれるやうに満載した、繋ぎ方離し方からみ方ひつくりかへ



し方などの技巧をうるさいほどに用ひた、そして遙かに萬葉集と對照して、これほど自然を遠ざかり人爲を弄ぶやうになつたかと驚かされるやうな多くの歌を見ることが出来る。

延喜以後新古今時代に至るまでの歌人が、おしなべて貫之に隸屬して實情とかけ離れたことを詠んで、歌を玩弄品にしてゐた間に、聊か風變りなるは西行法師である。西行には、道心と花月風流の情と世間的關係の俗情とが深く相絡んだ、痛ましい、ゆかしい、嬉しい、悲しい、味ひがある。此の點が西行の精神上、先人未言の情を歌つたと言はるべきところであらう。

彼の歌は、その實生活の欺かざる聲であつた。この三種の感情の痛ましき纏れは、左の二首に於ても明かに認めるこ

とが出来た。

すつとならば浮世を厭ふしるしあらむわれには

曇れ秋の夜の月

いかゞすべき世にあらばやは世をも捨ててあな

憂の世やと更に思はむ

かやうな感想は、かれがその實生活によつて色讀體感したものであつて、何人も道ひ得なかつたものである。彼は、複雑な事柄を詠み込む點に於ては新古今の頃の潮流に棹し、而して眞情を歌ひ出だす點に於ては萬葉に復歸したものである。(五十嵐 カの文による)

ねがはくは花のもとにて春死なむそのささらぎの望
月のころ (西行)

「一六五一」

「御垣守衛士の焚く火の夜はもえてひるは消えつづものをこそ思へ」

源順 倭名類聚抄の著者。永觀元年歿、年七十三。

「一五七一—一六四三」

「水のおもに照る月なみを敷ふればこよひぞ秋のもなかなりける」

藤原公任 關白賴忠の子。詩歌・音樂に長ず。四條大納言と稱す。長久二年歿、年七十六。(一六二六一—一七〇一)

「朝またきあらしの山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」

源俊賴 經信の子。堀河・鳥羽・崇徳の三朝に仕へ、左京權大夫に至る。

「風ふけば蓮の浮葉に水こえて涼しくなりぬひぐらしの聲」

藤原基俊 右大臣俊家の子。左衛門佐に至る。

「夏の夜の月まへほどの手すさびに岩もる清水いく結びしつ」

藤原顯輔 顯季の子。左京大夫皇后宮亮に至る。

「秋風にながびく雲のたえまよりもれいづる月のかげのさやけさ」

藤原清輔 顯輔の子。皇后大進に至る。治承元年歿す。(一八三七)。

「散ればうしにほへばうれし梅の花思ひわづらふ春の風かな」

藤原俊成 俊忠の子。皇太后宮大夫に至る。五條三位と稱せらる。元久元年歿、年九十。(一七七五—一八六四)

「夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」

西行 歌僧。俗名佐藤清。鳥羽上皇に仕へて北面の士たり。二十三歳にして出家し、四方に周遊す。建久元年歿、年七十三。(一七七八一—一八五〇)

五十嵐 カ 文學博士。明治七年米澤市に生る。早稻田大學教授。

七 古歌の鑑賞

舒明天皇は、大和の高市岡本の宮に都せられた。御位にあること十三年にして崩じ給ひ、押坂の内の陵に葬り奉つた。はじめ息長足日廣額おきながたらしひひろぬかの天皇と申し、後に舒明天皇と申す。萬葉集の歌は、舒明天皇の御代から後は、漸次數量も多くなつて、彼此の間に系統づけても語られるやうになつた。

天皇 香具山に登りて望國くまし給ひし時
御製の歌

倭には 群山あれど とりよろふ 天の香具山
登り立ち 國見をすれば 國原くにばらは 煙立ち立つ
海原うみは 鷗立ち立つ うまし國ぞ あきつ島 倭
の國は

天の香具山 大和國十市郡にある山。今は磯城郡に屬す。

群山 多くの山。
とりよろふ 取揃ふ。具備。

國見 眺望の意。

海原 香具山の麓なる埴安の池の廣き水面をいふ。

「この大和の國には、多くの山があるが中にも見事なのは、この天の香具山である。その山に登り立つて國見をすると、國の廣い所には煙があちらにもこちらにも立つてゐる。水面には水鳥がそこにもこゝにも立つてゐる。良い國であるなあ、この大和の國は。」

萬葉歌人の祖とも申すべき舒明天皇の御製として、萬葉集の歌の、最大多數の舞臺なる大和の國の美を叙述せられたのは、いかにも適切である。國土を美める歌は、古くから數あるが、この歌は高處から見下した特色がよく、煙立ち立つ、鷗立ち立つの句に見えて、いかにも美しい古代大和の有様が窺はれる。歌體が五七の句を重ねただけの、句數が偶數であるのも、古長歌の正しい風格である。

岡本の天皇の御製の歌一首

うまし國 「うまし」はほめ詞。
あきつ島 「大和」の枕詞。

岡本の天皇 舒明天皇。

夕されば 小倉の山に 鳴く鹿は 今夜は鳴かず
寝宿にけらしも

「夕方になると、いつも小倉の山に鳴く鹿は、今夜は鳴かないで寝てしまつたやうである。」

こゝに、愛が禽獸に及ぶ御製を記すのは、萬葉集の歌が、すべて愛にもとづくものであることを代表せしめたのである。國土を愛し人間を愛し、禽獸を愛して、光輝あるこの集は成り立つたのである。

天皇 宇智野に遊獵し給ひし時 中皇命

間人連老をして獻らせたまふ歌

やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫でたま
ひ 夕には い倚り立たしし 御執の あづさ弓
の中弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし

夕されば 夕方になれば。

中皇命 女性にして帝位に就かれたる方、こゝでは、後に帝位に即かれたる皇極・齊明天皇。
「い倚り立たし」は發語。御執の 動詞「取る」の敬語法「取らす」の名詞法に、接頭語「み」が添へるもの。御弓を直ちに「みとらし」といふ。こゝは、梓弓の修飾句。
あづさ弓 梓の木で作れる弓。

暮獵に 今立たすらし 御執の 梓弓の 中はず
の 音すなり

反歌

たまきはる 宇智の大野に 馬雙めて 朝踏ます
らむ その草深野

「わが天皇陛下の朝には愛撫し給ひ、夕には傍にお寄り立ちになつた、御料の梓弓の中弭の音が致します。朝獵に今お立ちになると見えます。夕獵に今お立ちになると見えます。御料の梓弓の中弭の音が致します。」

「大和の宇智の大野原に馬を並べて、朝お踏み遊ばしてでございませう。その草の深い野を。」

この歌は、中皇命の御歌か、間人連老の歌かといふ論がある。中皇命の御歌ならば、御の字が無くてはならぬ。間人連老

中弭 弓の上下、弦をかくる所を木弭末弭と云ひ、これに對して中間を中弭といふ。
今立たすらし 「立たす」は、立つの敬語法。
反歌 長歌のうちの一節が分離獨立したるものにて、古き長歌にはなし。
たまきはる 枕詞。内・命・世等を修飾する。
馬雙めて 馬を並べて。多くの騎馬にて獵をせらるるをいふ。
踏ます 「踏む」の敬語法。

が單に御歌の使者としていただけならば、題辭に名を出すこともあるまい。かたゞ、中皇命の旨を承つて、間人連老の作つた歌と考へる。

長歌は、二段から成つてゐる。それと同一の句法をもつて結んで、重疊の調を成してゐる。偶數句形式で、御執の梓弓の中弭の音すなりと、ほとんど同音數の短句を重ねて結んでゐるのは、雄勁な古格である。朝には夕にはと對句を用ひ、朝獵に暮獵にと對句でこれを受けたのも、用意がある。然し朝と夕と異なる時間を一首中に並立させたのは、今がいつれの時であるかを明かにすることが出来ない。

反歌は、四句で切れ、一旦内容は完結する。五句は更に獨立した句で、草深い野を感歎したものと解すべきである。

持統天皇は天武天皇の皇后にまします。夫帝の崩後、帝位

持統天皇 天智天皇の皇女
朱鳥四年即位同十一年讓
位。大寶二年崩御。御壽

に即き、在位十年にして、文武天皇に讓位し給うた。はじめ高

天原廣野姫の天皇と申し、後に持統天皇と申す。

天皇の御代には、柿本人麿をはじめ、歌道の天才輩出して、空前の盛觀を成した。いはゆる萬葉集の黄金時代といふべきもの、この御代に始るのである。

天皇の御製の歌

春過ぎて 夏來たるらし 白袴の 衣ほしたり

天の香具山

「春が過ぎて、夏が來たことと思はれる。天の香具山のほとりでは、白い織物の衣を乾してゐる。」

藤原の宮の附近から、天の香具山を望まれたのであらう。その山麓の住民が、白い衣服を乾してゐるのに就いて、夏の到來をお感じになつたのである。

柿本人麿 持統・文武兩朝
に仕へ石見に歿す、歌聖
と稱せらる。

夏來たるらし 「來たる」は
來到るの約て、來着する
をいふ。「らし」は推量の
辭。
白袴の衣 「たへ」は織物の
總稱。

元明天皇は文武天皇の御母にまします。慶雲四年文武天皇の崩御せられた後を承けて、帝位にお即きになつた。和銅三年三月、始めて平城に都を遷し、こゝに七代の帝都をお開きになつたのである。

和銅元年戊申 天皇の御製の歌

丈夫の 鞞の音すなり もののふの 大臣 楯立
つらしも

「勇士たちが矢を放つ音がする。軍人の大臣が楯を立てて練兵をしてゐることと見える。」

前の御製は、表面には別に感情を表はす語が見えぬ。將軍が武備を整へてゐるといふだけで、語法はむしろ勇ましきものがある。かく感情を表面に露出せぬは、古歌の趣で、力強い樸直な線が、こゝから生れるのである。

元明天皇 第四十三代女帝。
御在位(一三六八—一三七四)
文武天皇 第四十二代天皇
御在位(一三五七—一三六七)

題意 天皇は慶雲四年御即位、和銅元年はその翌年なり。しかるに恰も蝦夷叛きて、和銅二年三月に征討の軍を出させらる。前年にその兵を練る物聲をお聞きになりて、御代の初に事あるか歎かせられたる御製。
ものふの大臣 軍人の大臣、即ち將軍。
楯立つらしも 軍備を整へてゐることと思はれるよ。

聖武天皇は文武天皇の皇子にあらせられる。和銅七年立つて皇太子とならせられ、神龜元年、禪を受けて帝位に即き給ひ、天平勝寶元年七月、位を皇太子に譲り給ひて、その八年五月、崩御せられた。すなはち奈良朝第三代の天皇にましまし、その御代は、いはゆる天平時代の盛りを現出した。

天皇の御製の歌

丈夫の 行くとふ道ぞ おほろかに 念ひて行く
な 丈夫の伴

「丈夫の行くべき道であるぞ。等閑に思つて行くな。大丈夫の人々よ。」

六年甲戌 海犬養宿禰岡麻呂 詔に應ふる歌

御民吾 生ける 驗あり 天地の 榮ゆる 時に 遇
へらく念へば

六年 天平六年。
海犬養宿禰岡麻呂 傳未詳。

聖武天皇 第四十五代天皇
御在位(一三八四—一四〇九)
和銅 元明天皇の年號。
(一三六八—一三七四)
神龜 聖武天皇の年號。
(一三八四—一三八九)
天平勝寶 孝謙天皇の年號。
(一四〇九—一四一七)
天平 聖武天皇の年號。
(一三八九—一四〇九)

「臣民の一人であります私は、この天地の榮える時に遇つたことを思ひますと、生ける効のあることであります。」

今來古往、聖明の代を讚稱した歌で、いまだかくの如く力強きものを見ない。初二句に、臣下としての自分の生効のあることを歌つて、云ひ切つたところも強い。第三四句に天下の光り輝く時を敘述したのも、簡にして有力である。天平時代の榮えは、ひとりこの歌あるに依つて、いかに輝かしく、我等の心を打つであらう。眞に聖武天皇の大御代の榮えを歌ひ表はした歌である。（武田祐吉の文による）

武田祐吉 文學博士。東京國學院大學教授。

ハ 歌謠に就いて

歌謠といふ語は、音樂に於ては歌を伴ふ小曲の謂で、或一定の形式を有するものとして考へられ、文學に於ては曲節を附して謠ふ詩として考へられてゐる。然るに過去に於ける音曲は十分に明らめる能はずして、文學の上に於てのみ之を見るのである。又演劇や舞踊とも提携したが、これも亦文學として考ふべきのみにて、音樂として考ふべき其の曲の傳はつてゐるものは十の一にも達しない。

但し、これは、平安朝時代末期までの古曲・古謠に對しての言で、鎌倉時代以降のものに至つては全く別に考へなければならぬ。何となれば、歌詞が先に出て曲節が後から出來たものが多いからである。即ち歌詞の内容を一層よく味はは

しめる爲に、曲節を附けたものが多く、抑揚と緩急とに富む
讀物と目すべき程度のもものが尠くないのである。例へば平
曲・宴曲・幸若舞曲・淨瑠璃など皆これである。これらの歌謡は
人の心に湧いた情を單純率直にいひ現したものが多く、曲
節に合はせて謠ふ便宜上、一定の形があつて、句の數や音の
數にも制限のあるのが通例である。けれども我が國の謠ひ
物には、散文に近い叙事詩風の長篇物があつて、これが歌謡
の主體をなしてゐた時代もあるので、必ずしも整然たる詩
形を有するものと限ることは出来ない。

歌謡を其の内容上から宗教的歌謡と世俗的歌謡とに分
けるのが最も便利である。神佛に對する讚歎・祈願乃至は懺
悔等の情を述べたものは前者で、世にいふ御和讚や讚美歌
の如きはこれに屬する。これらは我が國に於ては、其の數も

平曲 琵琶に合はせて平家
物語をうたへるもの。後
鳥羽天皇の頃より起る。
宴曲 酒宴の興を助ける歌
曲の意。鎌倉期の中頃よ
り建武中興の頃まで、武
士・僧侶・貴族の階級に行
はる。

幸若舞曲 後花園天皇頃
の人、桃井直詮、幼名幸若丸
によつて創められたる舞
曲。平曲の如き謠ひもの
に舞を伴ひしもの。

淨瑠璃 淨瑠璃節のこと。
足利義政の頃に作られた
る淨瑠璃姫物語を、節を
つけて語るに始る。發源
地は京都。樂器は初め琵琶
を用ひ、後、三味線と
なり、慶長年間には、操人
形に合はせて演ぜられ、
こゝに撰芝居と稱する一
種の劇を形成するに至
る。正保・慶安の頃(二三
〇三年—二三一年)
薩摩淨雲といふもの、江
戸に下りて淨瑠璃節を中

少く、其の流行も歐米諸國に比しては、遙かに劣つてゐたが、
我が歌謡史上には重要な地位に立つものである。後者の世
俗的歌謡は、人が此の世に處して得た思想や感情を詠じた
もので、其の内容も種々雑多であつて、田植草取・茶摘・白挽・石

曳・木遣・機織等の歌の他に馬子唄や獵師唄もある。盆踊や獅
子舞などに用ひる舞踊の歌も多く、君の御代を萬歳と壽ぎ、
主と崇める人の榮華を歎賞した祝賀の歌も到る處に謠は
れてゐる。その他、友愛の情・羈旅の思・離別・哀悼・追懷等の念を
謠つた社交上の歌、春夏秋冬四季折々の自然物・自然現象に
對する感興を述べた自然の歌もあり、他にまだ子守唄や童
謠の類もある。

又其の成立上から類別すれば、技巧歌と民謠との二つに
分つべきである。技巧歌とは何の某なる者が一定の目的の

興しその門下の高弟江戸
及び上方にて發展し、後
大阪の人竹本義太夫(正
徳四年歿、年六十四)出
づるに及び、淨瑠璃の曲
節完成し、義太夫といへ
ば、淨瑠璃そのものを指
す意に解せらるゝに至
る。

和讚 韻文的の國文を以
て、佛教宗祖の徳業をた
たへ歌ふもの。平安朝に、
天台・眞言の兩宗の流行
に伴ひておこる。いろ
は」歌などの如し。

石曳・木遣 織田・豊臣の頃
築城用の大なる木石を運
搬する爲に生じたる唄。
後、石曳・木遣の區別なく
なり、寛永以後は、名は
木遣なれども、勞働歌の
性質を失へり。

下に、構想の上にも、修辭の上にも、工夫を用ひたものを謂ふのである。これに反して、何時何處で誰が作り出したともなく口々に傳唱されるのが民謠である。民謠は實に民衆の聲で、民衆の有する天與の作詩氣分が産み出したものと見るべきである。いふ迄もなく技巧歌と民謠とは對立する處のものである。けれども技巧歌の作られた時や作者に對しては何の顧慮をも費すことなしに、其の歌の内容に、また曲調に共鳴して民衆が之を謠ふやうになれば、技巧歌は移つて民謠となつたものと解すべきである。世の流行歌なるものには此の場合が多く、自然流行歌を以て民謠となすべきや否やの問題も起るのであるが、余は流行歌の一部には疑もなく民謠が存在し、且つ民謠として扱ふべきものが存するのであると考へる。

民謠は當初何人かによつて謠ひ出されたのであるが、其の發生時に於て録されるのでなく、口から口へ謠ひ移されて、此所から彼所へと次第々々に擴がるのである。さうして其の際にはいくらかづつ變じて行つて、短く縮められることもあれば、長く作り添へられることもある。果ては其の曲節にも變遷があつて、全く別種のものかと思はれるほど變ることもある。

民謠の内容は國民の生活のその如く極めて多種多様で、世相はかなりの處まで此の上に反映する。委しくいへば、世俗的の歌、勞作の歌、社交上の歌、これ等一切のものが此の中に存して、それがよく人々の生活情態を物語るのである。固より宗教上の信仰を歌つたものもあるべきであるが、我が國の民謠にはそれがごく少く、却つて教祖を嘲つたもの

や、教を説く僧を罵つたものに屢出逢ふ。これはわが一般國民が宗教に多くの親近性を有してゐなかつた時代があるものと見るべきではあるまいか。

民謡の表現は、極めて通俗な語で、極めて卑近に述べるのが常である。句の斷續も明瞭であり、其の曲も簡易で、輕快で、其の時代人の情緒を痛切に動かし得べき、自然の聲だからである。

これに反して技巧歌なるものは、民衆の中でも相當に教育ある人によつて作られるので、兎角故事を詩材にし、いひまはしを古風にしがちで、長篇になることが多く、其の意味がやゝもすると晦澁に陥る。曲も亦複雑で、纖細で、時に重厚濃艶で、短時日の修養では模倣し得られないものが多い。彼の歌澤節は其の好適例であらう。

歌澤節 嘉永年中より安政の初めにかけて、江戸に起りたる謠ひ物の名。

作り歌の中には、史上の人物事蹟や國民傳説に就いて叙したものがあつた。これ等は當然叙事詩に屬すべきであるが、叙事よりも叙情が主で、曲節も纖細で、文章も長くなく、形も整つて居つて、どうしても歌謡と見なければならぬものがある。例へば、古くは羽衣、浦島、小町、松風村雨、次いで常盤義經、曾我兄弟、西行の如き説話上の人や實在の人に關して謠つたものにそれがあつて、わけて江戸長唄や淨瑠璃の中に多く、又木遣歌や踊歌の中にも混在する。

歌謡は固より主觀詩たる抒情詩の一部に限るのであるが、時にまた極めて客觀詩の領域に接近した叙事詩的抒情詩をも包含し、更に進んでは純客觀詩たる叙景詩をも取入れる。

各地方民謡には、一見純客觀詩ともいふべき叙景詩であ

羽衣 卷八「羽衣」參照。
浦島 浦島太郎の傳説。
小町 平安朝初期の歌人小野小町を脚色したもの。
松風村雨 松風村雨は、在原業平の兄行平が須磨浦にありし時、寵愛したりと傳ふる姉妹の名。
常盤 義經(牛若丸)の母常盤御前。
江戸長唄 江戸の歌舞伎劇に用ひる長篇の唄の意。遠く寶永の頃に始り、相續いて今日に至る。
踊歌 伊勢の宇治山田におこりし伊勢音頭や、江戸におこりし大燕舞の類。感情や意志をあらはしたる詩。
抒情詩・客觀詩 附録「文學形態圖表」參照。

つて實は主觀詩で、立派な抒情詩がある。

たとへば

高い山から 谷底見れば

瓜や茄子の 花盛り。

は確かに叙景詩と呼ぶべきものである。けれども自然を愛賞する我が國民は此の種の叙景詩を多く作り出して居るので、客觀詩たるの故を以て、之を歌謠の埒外におくことは出来ぬ。しかし純粹の叙景だけでは、人に十分の満足を與へ難く、これに作者の主觀が混入して抒情味が加はり、所謂情景一致で潤ひが生じて來るのである。歌謠としては固よりこれに多くの價值を認むべきであつて、傑作も此の部類に多いのである。

我が國の音樂は三韓・唐・林邑その他の外來樂に出會つて、

三韓・唐の樂 その傳來はかなりに古く、既に大寶令の雅樂寮に、唐樂・新羅樂・高麗樂・百濟樂等の樂師や樂生を置くことを規定されたり。
林邑 今の佛領印度支那のサイゴンサイゴンの北に當る地。聖武天皇の朝、その國の僧來りて林邑の舞樂を傳へたり。

こゝに驚異と模倣と同化との三時期を經過して、ともかくも再び邦樂と名づくべきものが發生し、成長し、圓熟して、現代に及んだのである。而して今又歐洲音樂と觸接して、驚喜と模倣とが一部人士の間に行はれてゐるが、他の美術・文學よりは遙かに後れて、未だ同化するには至らない。新たなる大日本帝國の新たなる音樂は、まさに建設せらるべくして未だ建設せられずにゐるのである。

平安朝時代の雅樂は朝廷の保護によつて榮え、室町幕府時代の能樂は將軍の保護によつて大成し、義太夫は大阪町民の歡迎裡に、江戸淨瑠璃・江戸長唄は江戸町民の抱擁によつて出來上つたのである。今や新時代の新國民の満足すべき音樂・歌謠は、その渾成の美を吾等によつて實現せなければならぬのである。(高野辰之の文による)

雅樂 平安朝及びそれ以前の音樂及び器樂の總稱。我が國固有のものゝ外來のものゝあり。
義太夫 第五六頁の「淨瑠璃」參照。
江戸淨瑠璃 薩摩淨雲以後の江戸淨瑠璃は、寛文(二二二一—二三三二)の頃近江節、元祿・寶永(二三四八—二三七〇)の頃に土佐節・外記節・永閑節・半太夫節、享保(二三七六一—二三九五)の頃に河東節等の支流を生ず。中にも河東節は最も江戸の人氣に合致せり。
高野辰之 文學博士。長野縣の人。東京音樂學校教授。

九 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら陰謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ、再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるるか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思

ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀なる。

憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふか、と哀なり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありとも、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらむ。番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れはてて、猶もる物は秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劔伏拜み、汐干に今や鳴海、鴻、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづこ

俊基朝臣 藤原氏。後醍醐天皇の寵眷を得、資朝と共に興復の謀に參し、事露はれ、辯疏して漸く解く。後に又僧文觀の陳述によりて再び捕へられ、元弘二年鎌倉にて殺さる(一九九二)七月 元弘元年。

交野の春「又やみむ交野のみ野の櫻が花の露さる春の曙(藤原俊成)交野は大阪府北河内郡にあり。紅葉の錦「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦さぬ人ぞなき(藤原公任)」

逢坂の關「あふ坂の關の清水にかけ見えて今やひくらむ望月の駒(紀貫之)」

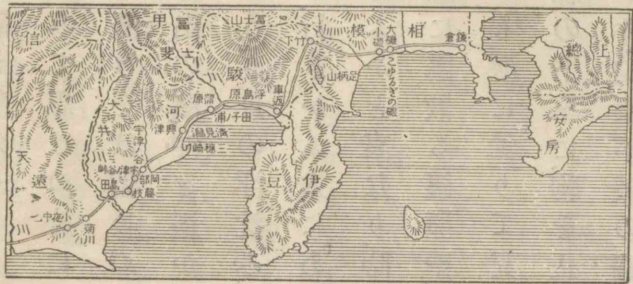
うねの野「近江より朝立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は(古今集大歌所御歌)時雨もいたく「白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり」(紀貫之)鏡の山は「鏡山いざ立ちよりて見て行かむ年経ぬる身は老いやしぬると」(大伴黒主)

汐干に今や「さよ千鳥聲こそ近くなる海瀉傾く月に潮やみつらむ(藤原季能)」

と遠江濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬ
る身にしあれば、誰か哀とゆふ暮の、入相なれば今はとて、池

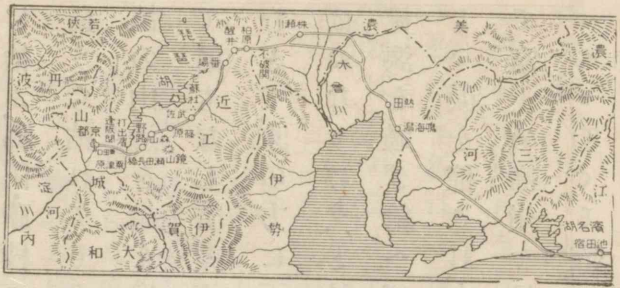
田の宿に着き給ふ。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉を催
せば匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、
小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み
來て、そのとも知らぬ夕暮に、家郷の天
を望みても、昔西行法師が「命なりけり」
と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨
ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早
み、日已に亭午に昇れば、かれいひ進ら
するほどとて、輿を庭前に昇き止む。轅
をたゞきて、警固の武士を近づけ、宿の



命なりけり「年たけてまた
越ゆべしと思ひきや命な
りけり小夜の中山」
(西行法師)

光親卿 中納言宗行卿の誤
ならんといふ。



名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答
へければ、承久の合戦の時、院宣書きた
りし咎に依りて、光親卿、關東へ召下さ
れしが、此の宿にて斬られし時、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡。
今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我
が身の上になり、あはれやいと増り
けむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書
かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじ流に身をや沈めむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行

龜山殿 京都の西郊嵯峨に
ある龜山の離宮。

幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷯首の舟
 に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今
 は二たび見ぬ夜の夢と成りぬと思ひ
 續け給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡邊の
 眞葛うら枯れて、ものの悲しき夕暮に、
 宇都の山邊を越えゆけば、蔦・楓いと茂
 りて道もなし。昔、業平の中將の住所を
 求むとて、東の方に下る時、夢にも人に
 逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。
 清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、
 いと涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津・蒲原うち過
 ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に
 比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や



挿繪 菊川宿（東海道名所
 圖繪）

夢にも人に「駿河なるうつ
 の山べのうつゝにも夢に
 も人にあはぬなりけり」
 （伊勢物語）

富士の高嶺を「富士の根の
 煙はなほぞ立ちのぼる上
 なきものは思なりけり」
 （藤原家隆）

浅き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世を廻る車返
 し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろし
 て、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つ
 もれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

（太平記）

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾
 重とも、しらぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代
 の松に懸れる磯の浪、和歌吹上を外に見て、月に瑩ける玉
 津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習
 なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す
 時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。（太平記、熊野落の一節）

太平記 四十卷。作者不詳
 後醍醐天皇の文保二年よ
 り後村上天皇の正平二十
 二年まで五十餘年間の戦
 亂に關することを記せ
 り。

一〇 流泉・啄木

今は昔、源博雅といふ人ありけり。延喜の御子兵部卿親王の子なり。萬づのことやんごとなかりける中にも、管絃の道になむ極みたりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人村上の御時に殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵かこを造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色ざしきにてなむありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に弾く。

然る間、この博雅この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞

源博雅 琵琶の名手。克明親王の長子。博雅三位と稱す。天元三年歿、年六十二。(一五七九—一六四〇)
 延喜の御子 醍醐天皇の皇子。
 兵部卿の親王 克明親王。
 村上 第六十二代の天皇。
 逢坂 大津市の南、京都府と滋賀縣との界にあり。
 敦實 宇多天皇の第八皇子。宇多源氏の祖。康保四年歿、年七十一。(一五五七—一六二七)

かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人をもて内々に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし」と盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

よの中はとともかくても過してむ宮も藁屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はむと思ふ心深く、それに盲命あらむことも測り難し、また我も命を知らず、琵琶に流泉・啄木といふ曲あり、これは世に絶えぬべきことなり、唯この盲のみこそこれを知りたるなれ、かまへてこれが弾くを聞かむと思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾

「ことやうなれば行かず」

「かまへてこれが弾くを聞かむと思ひて」

くことなかりければ、その後三年の間、夜なく逢坂の盲が
庵の邊りに行き、その曲を今や弾く今や弾くと密かに立
聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五
日の夜、月少しうはかげりて、風少し打吹きたりけるに、博雅
あはれ今宵は興あり、逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木は弾くら
めと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶を搔鳴らし
て、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思
ひて聞くほどに、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世
を過すとて

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あ
はれと思ふこと限りなし。盲獨言に曰く、「あはれ興ある夜か
な。若し我にあらぬすきものや世にあらむ。今夜心得たらむ

人の來よかし。物語せむ」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王

「聲を出して」

城に在る博雅といふ者こそこれに來たれ」といひければ、盲
の曰く、「かく申すは誰にかおはします」と。博雅の曰く、「我はし
かゝりの人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年こ
の庵の邊りに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬ」と。盲これを聞
きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かた
みに物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聽かむ」といふ。盲、故
宮はかくなむ彈き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へしめて
けり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひ
て、返すゝ喜びて、曉に歸りけり。

これを思ふに、諸の道は唯かくの如く好むべきなり。それ
に近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きな
り。蟬丸卑しきものなりと雖も、年頃宮の彈き給へる琵琶を

聽きて、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂にはあたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなむ語り傳へたるとや。〔今昔物語〕による。

劍

本

白銀の目貫の太刀をさげ佩きて、奈良の都をねるは誰が子ぞ、ねるは誰が子ぞ。

末

石の上、ふるや男の太刀もがな、組の緒垂でて宮路通はむ、宮路通はむ。

〔神樂歌〕

今昔物語 六十卷。宇治大納言物語ともいふ。源隆國の著なり。天竺・震旦・本朝の小話を収録せるものにて、毎篇の始を「今は昔」の語にて筆を起せり。

神樂歌 平安朝時代に流行せし歌曲にして、朝廷の儀式又は神社の祭禮の舞樂に用ひらる。その現今に傳はれるもの三十七曲あり。

二 有王島下り

さるほどに、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。

僧都の稚くより不愍にして召使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日すでに都へ入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行向ひて見けれども、我が主は見え給はず。如何に。と問へば、それはなほ罪深しとて一人島に残されぬ。と聞きて、心憂しなども愚かなり。常は六波羅邊に佇みて聞きけれども、何時赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍びておはしける處へ参りて、この瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今は如何にもして

有王 俊寛僧都の僕。

鬼界が島 今の鹿兒島縣大島郡の島。琉黄島ならんと云はる。

二人 丹波少將藤原成經。平判官康頼。

今一人 俊寛のこと。俊寛は寛雅の子。僧都に任ぜられ、法勝寺の執行となる。平清盛の專横を憤り、治承元年（一一三三）藤原成親等と結び、後白河法皇を奉じて兵を擧げんとし、露はれて、成經・康頼と共に鬼界が島に流され、終に治承三年歿す、年三十七。

不愍にして 目をかけて。可愛がつて。

六波羅 京都市賀茂川の東、五條・七條の間。平家一門の邸あり。

彼の島へ渡りて、御行方をも尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はり候はむ」と申しければ、姫御前な、めならず悦び、やがて書きてぞ賜うでける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず唐船の纜は四月五月に解くなれば、夏衣たつを遅くや思ひけむ。三月の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩潟へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、著たる物を剥取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ人に見せじと、元結の中には隠しける。

さて商人船に乗りて、件の島へ渡りて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人あれども、言ふ詞をも聞知らず。有王島のものに行向ひて、「物申さむ」といへば、「何事」と答ふ。これに

唐船 支那に通商する船。
夏衣たつ の「たつ」は「立つ」と「裁つ」。

都より流されさせ給ひたる、法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる。」と問ふに、法勝寺とも執行とも、知りたらばこそ返事はせめ、たゞ頭を振りて、「知らぬ」といふ。その中に或者が心得て、「いさとよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、あそここゝと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず」とぞいひける。山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋めて往來の道も定かならず。晴嵐夢を破りては、その面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず。海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。
或あした、磯の方より蜻蛉などの如くに瘦せ衰へたる者、よろほひ出で來たり。もとは法師にてありけりと覺えて、髪

法勝寺 京都市岡崎にありし天台宗の寺。白河天皇の創建にかり、應仁の亂以後廢絶す。
執行 寺社にある役僧。寺院の諸務を統ぶ。
いさとよ 否然らずの意。

白雲云々 和漢朗詠集に紀齊名、
山還 雲埋ニ行客跡、
松寒 風破ニ旅人夢、
沙頭云々 同じく後江相公沙頭刻印鷗遊處。
水底模書雁度時。

は空様そらさまにおひ上り、萬づの藻屑取りつけて、荆棘かどらを戴きたるが如し。繼目つぎめあらはれて皮ゆたひ、身に著たるものは絹布のわきも見えず、片手には荒海布あらいを持ち、片手には魚を貫ひて持ち、歩むやうにはしけれども、はかも行かず、よろ／＼としてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐こぎ人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。

はや、かれもこれも次第に歩み近づく。若しかやうの者にも我が主の御行方や知りたると、「物申さむ」といへば、「何事」と答ふ。これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給ふべきなれば、「これこそそれよ。」と宣ひもあへず、手に持てる物を投棄てて沙すなの上にぞ倒れ伏す。

繼目 關節のこと。
ゆたひ 肉落ちて皮のたるむこと。

乞丐 乞食。

さてこそ我が主の御行方とは知つてけれ。僧都やがて消入り給ふを、有王膝の上に搔きのせ奉り、「多くの波路を凌ぎつ、遙々これまで尋ね参りたるかひもなく、如何に、やがて憂目を見せむとはせさせ給ひ候ぞ。」と、さめ／＼とかき口説きければ、僧都少し人心地出で來、扶け起され、誠に汝多くの波路を凌ぎつ、遙々とこれまで参つたるこそ神妙なれ。たゞ明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀しき者どもの面影を夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來たるをもたゞ夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。有王、「こは現にて候なり。さてもこの御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。」と申しければ、「いとよ、これは去年少將や判官入

去年 治承二年。
少將 成經をさす。
判官入道 康賴をさす。

道が迎への時、その瀬に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の、『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きしを、愚かに若しやと頼みつゝ、承らへむとはせしかども、此の島には人の食物も絶えてなき處なれば、身に力のありしほどは、山に登りて硫黄といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず、かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて網人、釣人に手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日までは承らへたれ。これにて何事をもいはばやとは思へども、いざ我が家へ』と宣へば、有王あの御有様にても家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け参らせ、教に従ひて行くほどに、松の一村ある中に、より竹を柱とし、蘆

八〇 その瀬 その折。その時。

九國 九州。

より竹 波に漂はされて濱邊に寄來れる竹。

を結びて桁梁にわたし、土にも下にも、松の葉をひしと取懸けたれば、雨風溜るべくも見えざりけり。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、去年少將や判官入道迎への時も、これらが文といふ事もなし。今又、汝が便りにも、かくとも言はざりけりな』と宣へば、有王涙に咽びうつ伏して、暫しは御返事にも及ばず、やゝありて起上り、涙を抑へて申しけるは、『君の西八條へ出させ給ひし後、官人参りて資財・雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隠しかね参らさせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、此の童ばかりこそ時々参りて、御宮仕仕り候なり。いづれも御歎の愚かなる方は候はねども、中にも稚き人は、餘りに戀ひ参らさせ給ひて、参り候度毎に、『如何に有王よ。我を鬼界が島と

西八條 京都八條の北にあ
りし清盛の邸。
官人 檢非違使廳の役人。
追捕 官に没收すること。

鞍馬 京都府愛宕郡。京都
市の北方。

かやへ具して参れ。』と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に瘡かさと申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は其の御歎と申し、又此の御事と申し、一方ならぬ御物思に思召し沈ませ給ひて、打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしけれ。それより御文賜ひて参りて候。』とて、取出でて奉る。僧都これを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、などや三人流されおはします人の、二人は召還されて候に、何とて一人残されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、女の身ほどいひがひなきことは候はず。男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、なか尋ね参らで候べき。この童を御供にて急ぎ上らせ給へ。』とぞ書かれたる。これ見よ、有王よ。この子

瘡 抱瘡のこと。

が文の書きやうのはかなさよ。』おのれを供にて急ぎ上れ。』と書きたることの恨めしさよ。俊寛が心にまかせたるうき身ならば、何とて此の島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になると覺ゆるが、これほどにはかなくてはいかでか人にも見え、宮仕をもして、身をも助くべきか。』とて泣かれるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。この島へ流されて後は、曆もなければ、月日の立つをも知らず、只おのづから花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲、麥秋を送れば、夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月・黒月の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし時、此の子が行かむと慕ひしを、やがて還らむずるぞと慰め

はかなさ ことにてはとりとめのなきこと。

人にも見え 人の妻となること。見えは「見られ」の意。

人の親云々 後撰集卷十六 雜歌二に、藤原輔一人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな。和漢朗詠集卷上夏の部に李嘉祐、

「千峯鳥路含梅雨、五月蟬聲送麥秋。」

「五月蟬聲送麥秋。」

「五月蟬聲送麥秋。」

白月・黒月 白月は満月。黒月は晦の月。

ござんなれ 「こそあるなれ」の約轉。西八條云々 治承元年、平家を討たんとして事露はれ、西八條の邸に召されし時のことをいふ。

置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りとだにも思はましかば、今暫くもなどか見ざらむ。親となり子となる。夫婦の縁を結ぶも、皆この世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それは生身なれば、歎きながらも過さむずらむ。さのみ永らへて、おのれに憂き目を見せむも、我が身ながらつれなかるべし。とて、食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と申すに、僧都庵の中にて、遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王、空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣きあきて、やがて後世の御供仕るべく候へども、この世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ参らすべき人も候はず。しばしながらへて御菩提を弔ひ参らす

契 約束事。

心苦し 氣がかりなり。

彌陀の名號 阿彌陀佛の名號。普通には「南無阿彌陀佛」の六字。
臨終正念 命の終るに臨みて、心亂れず正しきこと。

後世 あの世。來世。

菩提 梵語。正覺と譯す。

べし。とて、寢處を改め、庵を切りかけ、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取りかけて、藻鹽の煙と爲し奉り、茶毗事をへぬれば、白骨を拾ひ、首にかけ、又商人船の便りにて、九國の地にぞ著きにける。

それより僧都の御女の忍びておはしける御許に参りて、ありし様を始より細々と語り申す。なか／＼文を御覽じてこそ、いとゞ御思は増させ給ひて候ひしか。件の島には硯も紙もなければ、御返事にも及ばず、思召されつる御事どもは、さながら空しくて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見参らせ給ふべき。たゞ如何にもして御菩提を弔ひ参らせ給へ。と申しければ、姫御前聞きもあへ給はず、伏しまろびてぞ泣かれける。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に行ひ

茶毗 梵語。火葬のこと。

他生 今生以外の他の世界。
曠劫 極めて長き時間。

法華寺 奈良縣添上郡佐保町にある尼寺。

すまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納め、法師になりて、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。かやうに人々の思ひなげきの積りぬる平家の末こそおそろしけれ。(平家物語)

祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、

盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢

の如し、猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。(中

略) 間近くは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申

しし人の有様傳へ承るこそ、心も詞も及ばね。(平家物語)

七道 東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。

平家物語 普通は十二卷に劍卷・灌頂卷の二卷を加ふ。平家の勃興より滅亡までを記せる叙事的文學にて、史傳と見るべき。平家琵琶の立場より云へば、説話としての「語り物」。作者不詳。

三 反省する心

萬葉集と古今和歌集との比較によつて、平安朝の初には、興味を中心に刹那より連續へ、個體的より典型的へ移りつゝあつたことを感ずると同時に、反省する心が目ざめて、實感の率直な告白より進んで、想像力による構成的表現の力を得つゝあつたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自我を連續の相のもとに見出さんとしたが爲であらう。

日記は現存せるものの他にもあつたことは、紫式部日記及びその他の日記を綜合して作つたらしい榮華物語によつても推察される。また光源氏が須磨に於て繪日記をつけ、紫の上もわが御有様を日記のやうに書き給へり。などある

萬葉集と古今和歌集との比較 第六課「貫之と西行」第七課「古歌の賞賞」参照。

紫式部日記 二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の日記なり。

榮華物語 四十卷。世織物語ともいふ。作者不詳。その卷名は月宴・花山・さまんくの悦・見はてぬ夢・浦々のわかれ・輝く藤・とりへ野・初花・岩蔭のかづら・つばみ花・玉の村菊・木綿四手・淺緑・疑もとの琴・音楽・玉の壺・御裳着・御賀・秘悔の大箱・鳥の舞・駒くらへ・枝・嶺の月・楚王の夢・衣の御・若水・玉のかざり・鶴

句からも、日記をつけることが、教養あり、徒然わぶる當時の
人々の常であつたやうに想像される。かゝる日記は、多くは
三人稱で書かれ、表現も回顧的であつた。蜻蛉更級和泉式部
日記等は和歌が中心であつて、他の部分は後に歌が作られ
た事情を想ひ出して叙述したと考へらるゝ節が多い。蜻蛉
日記の後半は短篇小説に近づいてゐる。伊勢物語は在五中
將日記と稱せられ、和泉式部日記は和泉式部物語とも稱せ
られた。

されば、平安朝の日記文學は抒情詩と物語との中間に位
するものである。自己の生活を反省し、その抒情的に高潮し
た刹那々々を聯結して表現し、連續の相のもとに人生を觀
照する態度は、更に自由に想像力を活かして人生を描かん
とする態度に進みゆくのが自然である。物語は汝と我との

の林・殿上の花見・歌合・
着るは佗しと歎く女房・
晚待星・蛛のふるまひ・根
合・煙の後・松の下枝・布
引の胤・紫野にて、宇多天
皇より後朱雀天皇までの
ことを載せ、ことに藤原
道長のことを詳述せり。
紫の上 光源氏の妻。
蜻蛉日記 八卷。右大將道
綱の母の作。天曆八年よ
り天延六年まで二十一年
間に於ける、作者の身邊
に起れることを年月のも
とに記せり。
更級日記 一卷。菅原孝標
の女の作。紀行を主とす。
和泉式部日記 一卷。長保
五年四月より翌寛弘元年
正月までの日記。
抒情詩と物語との中間(附
録、文學形態圖表参照)

關係の推移を内容とする。記紀は外なる世界の歴史であり、

萬葉集は内なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界
の歴史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歴
史を輕んじ、心情の歴史を重んじたことは、源氏物語や更級
日記の文によつても想像される。

しかし紫式部の考へた心の世界の價值は、餘りに主觀的
であつて、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心
情の推移が興味を中心になつてゐる。而してその心情の必
然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良
朝以後の人々は狭い主觀の世界に閉籠り、平安朝の貴族は
權勢や官位を得んとする運動と、歌舞遊樂の生活以外に爲
すことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、
世間的な經驗を殆ど持たなかつたのである。精神の成長は、

記紀 古事記・日本書紀。

更級日記云々 更級日記
に「源氏を一の巻よりし
て人も交らず几帳のうち
にうち臥してひきいてつ

主観と超主観的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後者が内化されることによつて可能になる。主観に閉籠つた人々は道徳的意識も臆げであり、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連続は弛緩倦怠分裂に終る。連続的な姿にせんとすれば却つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑刺たる印象をそのまま、に書きつけた。それは枕草子・徒然草の如き隨筆文學である。

萬葉集と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雑を通過した簡潔さがある。前者は刹那に生きた精神の表現であり、後者は連続の世界を分裂した刹那に集中した精神の表現である。和歌に於ても古今和歌集以後の典型的趣味を超えて、再び印象的な、叙景的な表現に赴いた新古今和歌集の新鮮味は、同一の傾向から生れた

つ見る心地、後の位も何かはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともしてこれを見るより外のことしなれば、自ら名などはそらに覚え浮かぶをいみじきことに思ひ云々」
御衣がち ことごとくしく衣服を着飾りて、そのために容姿は隠されて、只衣服のみ見ゆる様にいふ。

枕草子 清少納言の隨筆。異本多くして卷數も異なり。なほ卷九「歌より物語へ」参照。

新古今和歌集 二十卷。建

仁元年十一月三日、後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮・師等が撰進せるものにて、短歌千九百八十八首を分類列載せり。別に藤原長經の和文の序、藤原親經の漢文の序あり。

ものであらう。

奈良朝の歌人は純樸であつたが、平安朝の文學者は感傷的になつた。平安朝の優秀な作家は皆、縣あがたの少わかき國守か、その子女であつて、地方の素樸な生活に接觸し、それと堂上貴族の浮華な生活とを對照して眺め得る位置にあつた。彼等は地方人の蒙昧のうちにある時は都に憧れたであらうが、宮仕をするに及んでは、外面の光彩に心酔することなく、絶えず反省を促されたであらう。藤原氏に私有された文明は、制限された極めて狭苦しいものであつて、貴族生活を讚美することなくしては、その中に迎へ入れらるゝことなく、一言の非難もその圏外に放逐されたであらう。されば彼等の言葉は婉曲をきはめ、思ふことを臆にうちかすめ、人生の批評を言葉の奥深く秘めなければならなかつた。彼等は主観的

でありながら主観を直截に表現し得なかつた。かくて文章のリズムは低く、細やかな調子となり、その表現は不徹底になつた。源氏物語に表現された世界は、永遠の黄昏の沈滞した空氣が垂籠め、描かれた人々は優柔不斷である。平安朝の文明は裝飾の要素が多く、外面の華美によつて内部の貧弱を補はうとしてゐた。貴族等は只享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は恐ろしいことであつたらう。當時の佛教は、國々に國分寺を建てた奈良朝の人道的熱誠もなく、個人の壽福を祈る加持祈禱教となり、寺院・法會・僧侶・讀經等、皆貴族の官能を喜ばすやうに裝飾化された。疫病^{もの}のけの怖に悩み、享樂の生活によつて無氣力にされた當時の人生には、奈良朝の晴朗は影も留めてゐない。當時の秀でた人々には、この不徹底さを逃れんとする希望が早くから

リズム Rhythm. 旋律。

動いてゐた。貫之は諧謔と典型美によつて悲哀を忘れようとしてゐるが、蜻蛉日記の著者は當時の婦人の苦悶をかなり深刻に表現した。和泉式部は宮仕の浮沈多き生活と僧庵の靜かな生活との對照を夢のやうに感じた。紫式部は美的生活に對する興味と冥想の傾向とを有し、始は前の傾向に従つて現實と理想とを調和しようとしたが、晩年には後の傾向に従つたやうである。主観に生きることは、その奥に超主観的なものを見出すのでなければ、唯自己の世界を狭めるのみである。更級日記の著者は、物語と幻想とのうちに生き、夢と現實との區別もなかつた。夢が賣買されたのはこの時代のことである。藤原氏の榮華が衰微し始めた時、その黄金時代の追懷に現實を忘れようとしたことが、榮華物語などの書かれた動機であらう。しかし沈滞は息苦しいほど

夢が云々「玉葉和歌集」宇治拾遺物語「曾我物語」などに、その事實を記せり。

になり、彌縫と虚飾とによつて内部の靡爛を隠して來た文明は、全く行詰つて潰滅した。こゝに人生をはかなみ、これに執著するを迷妄とし、享樂を罪惡とする厭世觀が盛になつたのは自然である。西行や長明はこの思潮の代表者といふべきである。

平安朝の「つれづれ」といふ語は、世紀末のアンヌイといふ語を聯想せしめる。紫式部はその作品を中宮に奉る際に、「されど徒然におはしますらむ。またつれづれの心を御覽ぜよ。」と書いてゐる。これは紫式部日記が書かれた動機を語つてゐる句であらう。源氏物語を讀んでも、遊樂がつれづれを慰める爲に行はれたことが多かつたのを感じる。つれづれとは展開なき沈滞の悩み、充實した人生を見出し得ざる悶えではあるまいか。兼好がつれづれなるまゝに日ぐらし硯に

アンヌイ Ennuï. 倦怠。
中宮 上東門院を指す。

向ひて、心に移り行くよしなしごとをそこはかたなく書附くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。」と書いたのは、充實した生活、展開する思惟に入ることが出來ぬ。この途を見出さんがためには分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して、我が姿を如實に眺めなければならぬ。然るに何といふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感ずる。」といふ如き意味ではなからうか。西行や長明は社會と人生とに背き、自然の愛、彼岸の宗教に逃れようとした人であるが、兼好はこの對立の一半を捨てて、他の半面に生きるには餘りに複雑な心の所有者であつた。彼の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉室町時代の厭世觀とが争つてゐた。彼にとつて「つれづれ」わぶる」心は靜寂主義に赴かんとする心である。彼は、佛に仕う奉るこそつれづれも

なく、心の濁も清まること、ちすれ。』というて、社會生活を離れようとしてゐる。しかし一方には來世の信仰に生きることの出來ぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて清貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。そして彼が死を直視し、人生の無常を痛感したことは、却つて生の價値を切實に感じ、自己を知り、自己に忠實になり、自己に集中しようとした。かゝる複雑な精神内容を統一することは、當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者であつて、彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想が理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學

中稀に見る緊縮した文章であつて、辯證論的な考へ方の眞摯さがある。之を消閑の戲筆と見ることは不可能である。

(土居光知「文學序説」による)

つれづれわぶる人は、いかなる心ならむまざるゝかたなく、たゞ一人あるのみこそよけれ。世に従へば、心外の塵にうばはれて惑ひやすく、人に交はれば、ことばよその聞きにしたがひて、さながら心にあらず。人にたはぶれ、ものに争ひ、一たびは恨み、一たびは喜ぶ。その事定まれることなし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし。まどひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人みなかくの如し。未だまことの道を知らずとも、縁をはなれて身を靜かにし、事にあづからずして、心をやすくせむこそ、しばらく楽しむともいひつべけれ。生活人事、伎能、學問等の諸縁をやめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。(徒然草)

辯證論的 Dialectic. の譯。直觀・經驗によらず、概念を分析して事の理を研究すること。

土居光知 英文學者。高知縣の人。東北帝國大學教授。

摩訶止觀 天台大師が觀心のこと述べたる書。
徒然草 二卷。兼好法師の隨筆。

一三 七寶の柱

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。
大きな広い本堂に、一體見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。

日の光が幽かに漏れた。

裏門の方へ出ようとすると、傍に、寺の厨があつて、其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂、所謂光堂。續いて經藏、辨財天と言ふ順序である。皆參詣の人を待つてはじめて扉を開く。すぐ又あとを鎖するのである。が、寶物庫には番人が居て、經藏には、年の若い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つて居た。

中尊寺 岩手縣西磐井郡平泉にあり。藤原清衡の創立。

金色堂 境内の北方にあり。中尊寺の本堂。經藏 金色堂の西北にあり。

はじめ藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、かつ芝生に散つて敷いたやうであつた。

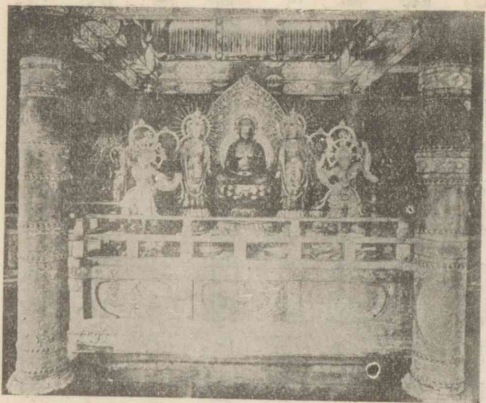
櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓から上らうとする坂の下の取附の處にも一本見事なのがあつて、山中心得の條を記した禁札と一所に、たしか「淺黃櫻」と云ふ札が建つて居た。けれどもそのみには限らない。處々汽車の窓から視た櫻は、奥が暗くなるに従つて、はつと冴えを見せて咲いたのはなかつた。薄墨鬱金、また其の淺黃と言つたやうな、どの櫻も、皆ぼつとりとし



挿繪 中尊寺本堂。

「奥が暗くなる」 森林帯を背景とする北方に進むに従つて。

て曇つて、暗い紫を帯びて居た。雲が黒かつたためかも知れない。



唯階の前の花片が、折からの冷たい風にはら／＼と誘はれて、さつと散つて、此の光堂の中を空ざまに、ひらりと紫に舞ふかと思ふと――羽目に浮彫りした孔雀の尾に玉を刻んで、緑青に錆びたのがなほ嚴かに美しい、其の翼をはら／＼とたたいて――ちら／＼と床にこぼれかゝる。と宙で、黄金の卷柱の光をうけて、はつと金色に繚るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を睜つた。

「暗い紫」懐古の色が加はつて漂へるのを感じる。「花片」作者獨特の筆致。

挿繪 光堂内部須彌壇。

床も、承塵も、柱も固より、イめるものの踏む處は黒漆の、落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれない。しかも些のけば／＼しい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われら仙骨を持たない身も、此の雲は且踏んでも破れぬ。其の雲を透して、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しき虹を其のまゝ、柱にして畫かれたる十二光佛の微妙なる種々相は、一つ／＼錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらはれて、清く明かに、而も幽かなる幻である。其の十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流るゝが如く輝かして、寶相華・勝曼華が透間なく咲きめぐつて居る。

此の柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀・觀音・勢至の三尊、二天・六

十二光佛 阿彌陀佛をその光明の徳について名づけたる十二の佛名。咲きめぐつて 寶相華・勝曼華の裝飾の美しさ。須彌壇 寺院の中央に備へ、佛像又は厨子を安置する壇。彌陀三尊 阿彌陀如來を中にして、觀音・勢至の二菩薩を左右の脇士とす。二天 帝釋天と梵天。

地藏尊が安置され、壇の中は眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、此に各一口の劍を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍がまだ其のまゝに横たはつて居るさうである。

雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、こゝに三箇の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれながらきら／＼と輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。さて經藏を見よ。また彌が上に懐かしい。



六地藏 六道・地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の衆生を化導せんが爲に、身を六體に別てる地藏菩薩。

挿繪 中尊寺經藏。天界一叢の云々 金色堂から立ち出てしことをいふ。

羽目には、天女——迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ、浮出て居る。影をうけた束貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文珠師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた青い毛の分厚な横顔が視られるのが、づづつと足を舉げさうな構である。右に此の轡を取つて、一寸振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優闍王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖ついて立つ。額も、目も、眉も、其のいづれもにこゝ／＼として、文珠も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ、獅子が。

此の須彌壇を左に、一架を高く設けて、こゝに紺紙金泥の

文珠師利 文珠菩薩。

迦陵頻迦 極樂に在つて美音で鳴くといふ鳥。

優闍王 憍賞彌國の王。釋迦に歸依す。西紀前五世紀の人。

善財童子 菩薩の名。生れたる時、宅内に自然に種種の財寶湧き出てしといふ。

淨名居士 維摩詰(ユキマキツ)。釋迦と同時の人。佛陀波利 龍樹菩薩の弟子。傳不詳。

一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で本經の圖解を描く。清麗巧緻にして、且神祕である。

今こゝに來て此の經を視ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧ぐるが如く、此は月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に、色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人居たのである。私の一禮に答へて、

「ご緩り、ご覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく堂の内壁に廻らした八つの棚に満ちて、二代基衡の此の一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書きの一切經、竝に判官最眞の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。——一切經の全部量は、七駄片馬と稱するのである。

毛越寺 同しく平泉にあり。二代基衡の建立。

一切經 佛教の經・律・論の三法門を悉く記したるもの。判官 義經のこと。

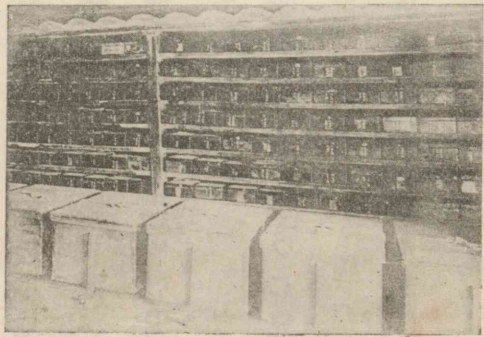
「拜見をいたしました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、寒く細りと草を行く。清らかな僧であつた。

「辨天堂を案内しますで。」と車夫が言つた。

向うを墨染で一人行く若僧の姿が、寂しく、而も何となく尊く、正にまさしく彼處におはする……天女の御前へ、我等を導く、つゝ、ましく謙讓なる一個のお取次のやうに見えた。

經堂を出た。今は眞晝ながら、月光に酔ひ、桂の香に卷かれた心地がして、亂れたまゝの道芝を行くのが、青く清明なる圓い床を通るやうであつた。



挿繪 經藏の内部。

階の下に立つて仰ぐと、典雅優麗なる辨財天の金字に縁して牡丹花の額がかゝる。

いかにや、年ふる雨露に彩色のかすかに成つたのが、木地の胡粉を却つてゆかしく顯はして、萌黄に群青の影を添へ、葉をかさねて、白緑碧藍の花をいだく。さながら瑠璃の牡丹である。

ふと高縁の雨落に、同じ花が二三輪咲いて居るやうに見えた。

扉が、ぎいざりくと——僧の姿は裏に隠れて見えずに開く。

眞白き面影、天女の姿は、すぐ其處にあらはれ、蜀紅の錦といふ天蓋も廣くかゝつて、眞黒き御髪の寶釵の玉一つをも遮らない御面影の妙なること、御目ざしの美しさ、……申さ

淨瑠璃寺 京都府相樂郡當尾村。法雲院と號す。
吉祥天 佛教に於ける天女の。

んは恐れ多い。たゞ西の方遙かに山城國淨瑠璃寺、吉祥天のお寫眞に似させ給ふ。白理優婉明麗なる、十八九ばかりの、ほぼ人だけの坐像である。

と、手をついて對したが、見上ぐる瞳に、御頬のあたり幽かに、今にも莞爾と遊ばしさうで、まぎ／＼とは拜めない。

さて壇を退きざまに、僧のとざす扉につれて、畏くもおんなごりさへ惜しまれまゐらすやうで、涙ぐましく又額を仰いだ。御堂其のまゝ、私は碧瑠璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たやうであつた。

花の影が、大きな蝶のやうに草に映じた。

下向の時、あらためて、見晴しの四阿に立つた。

伊勢・龜井・片岡・鷲尾、四天王の松は、畑中、畝の四處に雲を鎧ひ、揺絲の風を浴びつゝ、或者は蕭々として衣川に枝を聳か

四天王 義經の四天王。伊勢三郎・龜井六郎・片岡八郎・鷲尾七郎。

し、或者は戀々として高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに眺められる。

其の高館の址を靜かにめぐつて、北上川の水ははるく、瀬もなく、音もなく、雲の果てさへ見え、たゞ「はるく」と言ふやうに流れるのである。(泉鏡花の文による)

ひとり吉野の奥にたどりけるに、まことに山深く、白雲峯にかさなり、烟雨谷を埋んで、山賤の家處々に小さく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘のこゑは、心の底に答ふ。(中略)

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、二丁ばかりわけ入るほど、柴人の通ふ道のみはつかに有りて、さかしき谷をへだてたる、いと尊し、彼の「とくく」の清水はむかしに變らずと見えて、今もとくくと雫ちりけり。

露とくく、試みに浮世すゝがばや。(野ざらし紀行)

「はるく」と言ふやうに」語感をそのまゝに「流れる」の形容としたり。

泉鏡花 名は鏡太郎。金澤の人。明治六年生。小説家。

とくくの清水 西行法師の詠に「とくくと落つる岩間の苔清水くみほす程もなき住居かな」野ざらし紀行 一卷。芭蕉の紀行。

一四 鹽原

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は安からざる悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の獨りに倦憊れつゝ、始めて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野原に入れば、天は潤く、地は遐かに、唯平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帯の重巒、鹽原は其處ぞと見えて、行くほどに路は窮まらず、漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くる處に涼々の響ありて、之に架れるを入勝橋となす。橋を渡りて僅かに行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、壑深く陥りて、幾廻せる葛折の後には密樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々の花を發き、愈躋れば、遙かに木がくれ

西那須野の驛 栃木縣那須郡太田原の西方、東北本線の一驛。

古の那須野原 那須野の中央。東西約二四軒、南北約三九軒に互る。

關谷村 鹽谷村にある。西那須野驛より約一二軒。入勝橋 關谷のはづれの小川に架したる橋。

の音のみ聞えし流の水上は浅く露はれて、すはや、こゝに空山の雷、白光を放ちて頽れ落ちたるかと凄まじかり。道の右は山を躪りて長壁となし、石幽かに藓碧うして、幾條とも白糸を亂し懸けたる細瀑、小瀑の珊々として濺げるは、嶺上の松の調も、定めて此の緒よりやと見捨て難し。

白羽坂を躪えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を躪みて、山中の景は始めて奇なり。之より行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり。全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり。全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり。全村にして四十五湯。猶數ふれば十二勝十六名所。七不思議、誰か一々探り得べき。

そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨にし

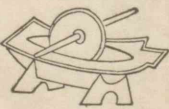
嶺上の松の調

「琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべ初めけむ」(齋宮女御)

白羽坂 西那須野驛より約一四軒。

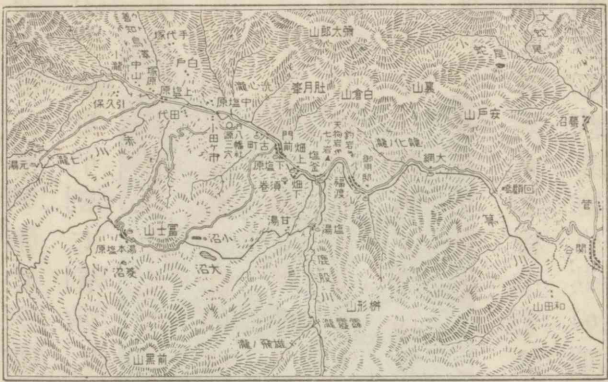
箒川 源を岩代境の高原山に發し、鹽原を貫流して那須野の西南限をなし、那珂川に合する。

藥研 藥種を細粉する器。

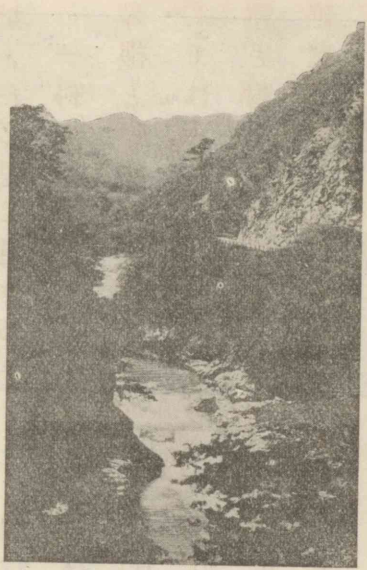


大網の湯 鹽原口より約二軒、温泉は箒川に湧出し、溪間に浴槽を設く。
福渡 大網より約三軒。鹽原温泉中、第一の繁昌地。

て、到る處巉巖の水を夾まざる無きは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀧、兒ヶ淵、左靱の險は古りて、白雲洞は朗かに、布瀧龍が鼻材木岩、五色岩、船岩などと眺め行けば、鳥井戸、前山の翠衣に染みて、福渡の里に入るなり。
途すがら、前面の崖の處々に躪躪の残り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留れば、又此の邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。名を問へば不動澤といふ。



踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、地を抜く何百丈と見上ぐる異形の天狗巖あり。絶頂には、はら／＼松も危く立竦み、幹竹割に割放したる断面は、半空より一文字に垂下



して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横たはりて高さ二丈に餘り、其の頂は平に潤がりて、寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、状態ろしげに蹲りて、老木の蔭を負

して、炭々たる其の勢、幾ど眺むる眼も留らず。足に任せて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水之が爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激

挿繪 箒川と、白雲洞の遠望。

ひ、急湍の浪に漬りて、夜な／＼天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物あり。其の昔、蒲生飛驒守氏郷此の處に野立せし事あるに因りて、野立石と名付くとか。それより鹽釜の湯、甘湯澤兄弟瀧、小太郎が淵などを過ぎて、いつしか畑下戸の里に著きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。此に清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨み、俯しては水石の糺々たるを弄び、仰げば西に富士、喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤に落ち來る流は二十丈の絶壁に懸りて、素縑を垂れたる如き吉井瀧あり。東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾深く、夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めたる別境なり。

蒲生飛驒守氏郷 織田信長・豊臣秀吉に仕ふ。文祿四年歿、年四十。(二二一六―二二五五)

畑下戸 福渡の西北一三〇〇米。機織の里ともいふ。清琴樓 作者紅葉の投宿せる温泉宿。

富士 鹽原富士のこと。箒川の右岸に聳つ。喜十六 鹽原富士の西に連なる山。牛腹に須卷温泉あり。袖の澤 畑下戸の前にて箒川に合す。落下して吉井瀧となる。琅玕 玉に次ぐ寶石。琅玕似珠者(説文)

我は此の繪を見る如き清穩の風景に値ひて、彼の途上險しき巖と峻しき流とのために、幾度か魂飛び肉銷して、理むる方なく搔亂されし胸の内は、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべてを忘れたり。

誠に好くこそ我は來つれ。胡ぞ來るの甚だ遅かりし山の麗しといふも、壤の堆きのみ、川の暢しといふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として抜く可からざる我が半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべき者ならんと、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚の者ならずや。看よ、看よ、木の緑も、浮かべる雲も、秀づる峯も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鶏の鳴く音も、空の色も、皆自ら浮世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と軽く、心は此の水と淡し。希はくば今より此の

如くにして我が生を了らんかな。

(尾崎紅葉の文による)

蒲原といふ宿にて障子に物を書きたるを見れば、旅衣裾野の庵のさむしろに積るもしるき富士の白峯といふ歌なり。心ありける旅人のしわざにやあるらむ。昔、香爐峯の麓に庵を占むる隠士あり、冬の朝、簾をあけて對の雪を望みけり。今富士の山のあたりに宿を借る行客あり、さゆる夜、衣を片敷きて、山の雪を思へる、彼も是も共に心すみて覺ゆ。

さゆる夜に誰こゝにしもふしわびて

たかねの雪をおもひやりけむ

田子の浦に打出でて富士の高根を見れば、時わかぬ雪なれども、なべて未だ白妙にはあらず、青うして天によれる姿、繪の山よりこよなう見ゆ。貞觀十七年の冬、白衣の美女二人ありて山の頂に雙び舞ふと、都良香が富士の山の記に書きたり。

富士のねの風に漂ふ白雲を

天つをとめの袖かとぞ見る (東關紀行)

尾崎紅葉 名は徳太郎。文學者。明治三十六年歿、年三十七。

香爐峯 第一三二頁参照。

貞觀 清和天皇の御宇。

都良香 清和・陽成二朝に仕ふ。元慶三年歿、年四十六。(一四九四—一五三九)

東關紀行 一卷。作者不詳。仁治三年八月、京都より鎌倉に至る踏次の紀行。

一五 飛行機より

我がメルクル機はかうして、六百馬力を六百馬力回轉させて、松本の上空をぐんぐん上昇しつゞける。それは、下から見たら、子供が兩掌に力をこめてもみ上げた竹トンボが、うなりを生じて空高く飛上るやうでもあつたらう。トンボが三千五六百メートルでとまつて、右に大旋回をはじめる。



北アルプス連峯の最高座、白馬から槍に一線を劃する飛驒山脈の突端、穂高の山塊。去年の夏は、このアルプス仁王の

メルクル機 愛機の名。水星機を意味す。
松本 長野縣松本市。

挿繪 徳本峠より見たる穂高岳。

白馬 信濃北西境、北日本アルプスの高岳。高さ二九三三米。
槍ヶ岳 信越西境に聳ゆ。北日本アルプスの高峯。高さ三一八〇米。
穂高 穂高岳。三〇九二米。

胸壁の正面を、徳本峠から飽かず眺めた。上高地の峡谷から下腹を仰いだ。焼岳からは右腹の筋骨を見た。今は眼の上に、左の肩から肋骨にかけて隆々としてゐる筋骨を讚美する。その徳本上高地、焼岳が左の窓に一齊に入つてくる。徳本から霞澤岳の山の線は、この仁王の前には地藏の肩のやうに優しい。上高地の盆地は、前穂高の陰に朝霧と一しよに沈んでゐる。その上の焼岳の白煙も霧の中に溶けこんで、たゞほのかに山の線を離れてゐる。腕時計を見ると、九時四十三分の朝立川を出てから二時間と一分。見渡す限り晴れ渡つてゐる。こんな恵まれた飛行機が又とあり得ようか。飛行機の缺點は進むを知つて停るを知らない事にある。機は惜しげもなく、一直線に北進する。この兩眼が寫眞のレンズだつたら！乗組員四人は入亂れ

徳本峠 上高地の東方の峠。二一三二米。
上高地 長野縣南安曇郡安曇村に屬す。海拔一五一五米の高原。
焼岳 二〇九四米。上高地の西南に聳ゆる火山。
霞澤岳 二六四五米。徳本峠の西に連なる。
前穂高 穂高山中の一峯。

「飛行機の缺點は」文に省略がある。速度の早い行文。

て右の窓左の窓からのぞく。

『富士が見える、富士が見える……』四つの頭が一度に

窓から後をふり向く。

機尾の上に、木版を押したやうな

真碧の富士の頂が、五寸ほど白雲の

上につき出てゐる。その下には乗鞍

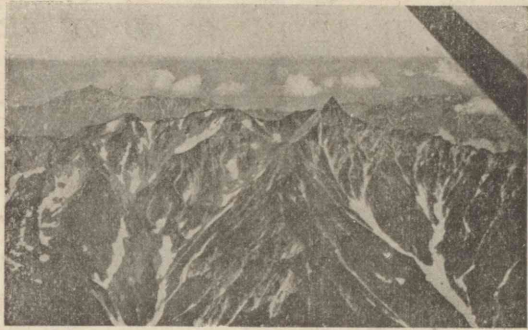
御嶽をめぐる山岳峯——陣笠と烏

帽子兜の大軍。

機の直下には山の力を象徴した

前穂高が聳える。唐澤の谷めがけて、

奥穂高から雪が白い蜥蜴のやうに



なだれこんでゐる。

もう一度上高地を振りかへる。梓川が、机の下をはふ蚊遣

挿繪 槍ヶ岳を中心の大噴
み岳・中岳及び笠ヶ岳。
(飛行機より)

御嶽 信濃と飛騨の國境に
聳ゆる休火山。三〇六三
米。

奥穂高 穂高山中の一峯。
一九〇三米。

梓川 槍ヶ岳附近より發
し、東流して犀川となる。

線香の煙のやうにほのかだ。

遂に槍だ！ 穂高の上から數分間、腕時計を見てゐる暇

もなく、北アルプスの最高王座、一萬尺の槍の尖端が窓の前

に突き出た。痛酷にして赤裸な威嚴！どこから觀ても槍ヶ

岳の形容はこの一句に盡きてゐる。少しでも山に登つた者

は恐らく誰でも感ずる一種の感傷——山岳の崇嚴に頭を

さげる無我の哀感——さういふ感じが、この時ほど強く筆

者を襲つたことはない。好い寫眞を取つてくれ！ フィル

ムはいゝかね？」 思はず怒鳴つたが、その聲は我ながら

亢奮してゐる。この亢奮は無論、一基の槍のため許りではな

い。槍を圍繞する遠近無數の高岳が形成する四邊の全體的

の効果だ。大將軍を大將軍に見せる綺羅星と居ならぶ大名

小名の威容だ。

「痛酷にして赤裸な威
嚴」
Stern and naked
dignity.

實の山へわけ入った慾深男が、あれもこれもと見まはすかのやうに、僕は右の窓と左の窓の間を、何度となく身をかはした。右窓からは、さつき通つて来た淺間の入道が、黒紗をかぶつた尼僧に化けて、細々と香煙を立ててゐる。その遙か後には、赤石の連峯が形のくづれた圓塚のやうに竝んで、その根元は雲の大原野になつてゐる。左の窓には、槍の番人のやうに大喰み・中岳が二の腕の力こぶを持ちあげてゐる。笠の連峯がその後、M字を押しつぶしたやうに、あるひは半開きの屏風のやうに擴がつてゐる。

直ぐ眼の下、機體の影からは槍澤と東鎌尾根の深谷が、槍の穂先めがけてA字線にかけ上つてゐる。萬年雪が鎌尾根の谷をもつとも深く埋めてゐる。お、寒む！窓から吹きこむ風が、師走の朝の木がらしである。だが、文化住宅の應接

淺間 信濃の東境の活火山。二五四二米。

赤石 信濃の東南境の山。三二二〇米。

大喰み 大喰み岳。中岳と共に槍ヶ岳に連なる。挿繪第一一八頁參照。

笠 笠ヶ岳。大喰み・中岳の背後に連なる。二八九七米(第一一八頁挿繪參照)。

槍澤 槍ヶ岳の西部の雪溪。東鎌尾根 槍ヶ岳の東部の雪溪(第一一八頁挿繪參照)。

間のやうなこの旅客機の中では、窓さへ閉めればシャツ一枚で居られる。それに、今外套のシャツのと着てゐられるものか。昨夜立川の宿屋に乗組員一同合宿した時の寢物語は「アルプスの上で落つこちたら、誰の胴だか首だか分らなくなるぞ」と冗談にも話し合つたのだ。機は四千メートル富士山の頂上と同じ高度で進んでゐる。

槍の穂にとまつた蟬のやうに小槍が見え出す。峯と峯との間の無限の谷、戦慄の谷から積亂雲が急に泳ぎ出る。岳と岳との襞の雪が、岳の彫刻線を明確にし、谷間をゆく白雲が岳の走線を浮彫りにする。

「おい、少し雲が出て来たぞ。」

「これ位なら大丈夫だ。」

「寫真には却つて變化があつていゝ。」

小槍 槍ヶ岳の北西方。

「寫眞にはいゝかも知れないが、飛行機は揺れだすぜ……」
だが、機は全く揺れない。アスファルトの道路の上を高級
自動車で走るやうな滑らかな進行だ。アルプスは谷が深い、
岳が切り立つてゐる、氣流がわるい、百尺二百尺の空中穴の
二十や三十は覺悟しろと恫喝されて乗つて來たものだが、
來て見ると張合ひのないほどの平滑さだ。これにくらべれ
ば、立川飛行場を飛びだす前の滑走の方が荒天の大難航だ
つた。

眼の前に見えた槍が見る／＼小さく後に走る。それでも、
あの鋭い尖端は沖の暗礁の上になつた燈臺のやうにくつき
りと出てゐる。奇つたな富豪でもあつて、あれをアルプスの飛
行燈臺としたら、あれに燈を點するのは、お寺へ常夜燈を奉
納するより、どんなに功德のあることだらう……など、ふ

アスファルト Asphalt.
道路舗装に用ひる塗料。
土瀝青。

エアポケット Air
Pocket. 飛行用語。飛行
機の動搖を發生する惡氣
流。風洞。

と空想的な思ひつきが浮かぶ。

このあたりは槍に率ゐられる硫黄湯の俣の線に並行し
てゐる常念・東天井・大天井の線が重なり合つて、北に走つて
見える。ほんとの山鯨の群だ。地層の最下に沈澱すべき片麻
岩が日本全國中で最高點に現れてゐるといふのでも有名
な常念のピラミッドは、機上からは六十五度以上の鈍角に
ひろがつてゐる。さうだ、一萬尺以下の岳の線はみんな鈍角
にひろがつて、地上から仰いだ形と變つてゐる。下を通る人
の眉目姿を二階から見様で心許ない。

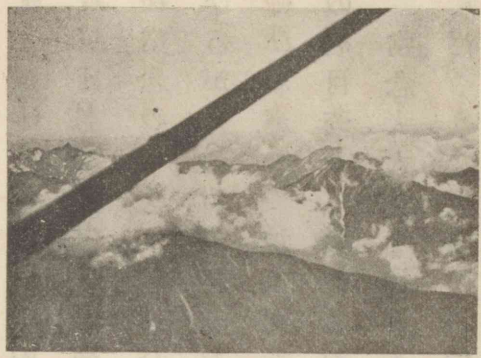
常念・大天井を過ぎると、二頭の猛牛の脊筋が併行になら
んだやうな二條の力線。その向うに、さいころでも押へたや
うな筋太の手の曲線——野口五郎岳・赤牛・薬師・赤牛とはよ
くぞ名づけた。跨がつて見たいやうな尾根續き、五郎岳も黒

硫黄湯の俣 何れも槍ヶ
岳に連なる山。

常念・東天井・大天井 何れ
も常念山脈中の山。常念
山脈—日本アルプスの東
縁に沿ふ一分脈。
常念岳 二七五九米。
東天井岳 二八四四米。
大天井岳 二九二二米。

野口五郎岳 北アルプス山
脈の一峯。二九二四米。
赤牛 赤牛岳。同上。二八
六四米。
薬師 薬師ヶ岳。同上。二
九八六米。

牛とでも呼びたい黒い脊筋。灰色の布でつくる舞臺の牛のやうに、皺が大まかに思ひ切つて引つはられ、描かれてゐる。



穂高から白馬に向つて、どの山も谷も皆相かはらず北走してゐる。そして、その強靱な力はどうだ。北アルプスは日本本土の屋蓋で、穂高から槍白馬の線はその上棟だといふが、なるほど一國の大屋臺骨の棟梁の貫祿はある。どしつとしてゐる。

機は依然として微動だもしない。

中島飛行士と片桐機關士はどんな格好をしてゐるか、三歩歩いて行つて、ドアをあけて見る。氷のやうな突風が一目算にかけこんで來て、原稿用紙が室の中にまきあがる。我

「北走」 進行する飛行機上よりの視覚。

挿繪 中央の前面が常念、その後は大天井、左は西岳、左端小槍。
(飛行機より)

私の席より一段高い座席に、二人が彫刻像のやうに竝んでゐる。左の中島君はセルロイドの氣流除けを通して前面に眼を配り、兩手で自動車と同じ圓いハンドルを握つてゐる。片桐君は枕時計の面をいくつも張りつけたやうな計器板をじつとにらんでゐる。回轉計、高度計、速度計、沈壓計、冷却水溫度計、傾斜計、それから羅針盤——皆時計の秒針のやうに忙しく回轉してゐる。人間の科學がつくつた巨鳥の腦神経と翼筋の集合所だ。中島君のハンドルは動かない。機は水平に進むだけだ。

「馬鹿に靜かだね——」のび上つて大聲を立てると、二人がにやつと笑つて此方を向いた。片桐君のやさしい絲のやうな目、中島君の皿のやうな張りきつた目、もう二三分してのぞきに來たまへ……」計器板の針が一度にみんなくるく

る回りだすよ……二人が意味あり氣に笑ひながら、僕の兩方の耳へどなつた。

湯の俣を直下にのぞくあたりの觀望の雄偉さ、猛鳥が胸をふくらませて兩翼を張り擴げる刹那のポーズ。右手の翼の陰からそゞり立つ豪壯な山塊の峭壁、それが翼と共に底知れぬV字谷をつくつてゐる。他の一方の翼の上には急傾斜をした陣笠の笠岳が浮かんでゐる。その右手に續いて、恐らくは野口五郎岳、烏帽子岳、しんにふを青く走らせた黒部五郎岳。

更につゞいて機の前直前に現れた針ノ木岳。全盛時代の力士常陸山を思はせる力に満ちた圓だ。その頭の上に立山雄山が數個の峯を均整に支へて寝そべつてゐる。左隣りに淨土岳の連峯が、師匠の身振りを真似る弟子のやうに同じ形

「兩方の耳へ」筆者の位置と二飛行士の位置。

ポーズ Pause 停止した形。

烏帽子岳 赤牛嶽の東北方にあり。二六二米。

黒部五郎岳 野口五郎岳の南西方にあり。二八四〇米。

針ノ木岳 信濃西北境の山。二八二米。

立山 越中東南部の山。二九九二米。

雄山 山頂に雄山神社あり。

淨土岳 針ノ木岳の西北方に見ゆ。

を見せてひかへて居る。どこを見ても雪のしわだ。斑点だ。怪奇な亂雲の團々が針ノ木岳の胸を覆ひながら上つてゆく。その白雲の團々の間に、眞黒に一條の龜裂が走り、その中の雪が白雲を通じて眼に沁みて来る。

白馬、鏑だ。常盤御前の帽子だ。小雪溪が稻妻形に一條、二條、三條……六條、下に向つて走つて大雪溪をつくつてゐる。あいにく、雲が帽子の右端からむくくと湧きあがつて来た。見る／＼、白馬がかくれた。さうして我等の機は、一瞬間でまんまると平和な線をした白馬大池の岳上に出てゐる。大池の水の色が空寂の結晶だ。その向うに、雪片を光らせた見當つかぬ連山、連峯の屏立。

機はこゝでは大旋回をしてアルプスの空を下りはじめ。十時二分、穂高の上から二十分に少し足らぬ。用心深い山

白馬大池 白馬岳の東北部にある湖。

白馬 第一一六頁參照。鏑嶽。信濃北境の山。二、九〇三米。

岳家は、穂高から白馬までの縦走は二週間を豫定するといふのに……

全くこれが夢のやうだといふのだらう。夢のやうといふ諺をこの時ほど適切に思つたことはない。勿體なや、穂高、白馬を二十分、恐らく僕だけは、近く二度とは飛行機でこゝまで來られまい。來ても、こんな快晴の日に旨くぶつゝ、かかるか何うかわからない。さう思ふと、白馬の上からこのまゝ、低地へ降りて行くのが残り惜しい。むさぼるやうに、もう一度あたりを見回す。白馬がやつと雲から出た。

昨年こぞの夏はT.A.兩君と一日がかりであの上へ登つたものだつた。山慣れない僕等は、大雪溪を上り了へて間もなく夜になり、葱平ねがだひらで脚が鉛になり、體重二十何貫のA君は岩の上をベッドにしてしまつた。それから九時過ぎに、山小屋へ

大雪溪 こゝでは白馬山中の大雪溪。
葱平 白馬山中の高原。

文字通りたどりついた時の極度の疲労と愉快。それを思ふと汗一滴ださずに、二十分間で北アルプス最高峯の上を縦走して了つたことは、冥加に過ぎた。だが、どことなく物足りない。山と自分とはなれ過ぎてゐる。山岳は飛行機の存在によつて少しも小さくなつてゐない。益々偉大に見える。すご味を見せる。山に親しみ、山と語るにはリュックサックを背負つて、汗まみれになつて登るより外ない。汗を流して、二週間かかつて、このコースをほんとに縦走して見たい！

機は鳶のやうに大池の上に大輪を描いてから、長野平野めがけて機首を下に向けたらしい。約束により又操縦室へ首を突込んで見る。中島飛行士は右のハンドルをぐつと前へ押してゐる。これで機尾の昇降舵が動いて、機首が下向きになつてゐるのだ。右脚でペダルをしつかり押してゐる。右

リュックサック Rucksack.
登山者などの用ふる背囊。
コース Course. 行路。

旋回だ。化物屋敷の中が一度にガタ／＼しだしたやうに、計
 器盤の七八ツの計器針が神経過敏に動きだしてゐる。その
 神経の動きを片桐機關士が一分の間違ひもないやうに凝
 視してゐる。プロペラーの音に兩耳の鼓膜をいやが上に緊
 張させてゐる。そして神経の急所々々に手をいれる。
 プロペラーの回轉がゆるまつて、機は半空中滑走かと思
 はれるやうな緩やかさで降りてゆく。白馬・大蓮華の隆起が
 平野と握手するあたりに、一本の急流がジクザグに北の方
 に飛んで行く。傾いた機の窓から見ると、川上と川下が逆に
 見える。地圖で見ると日本海へそ、ぐ姫川の上流らしい。

(鈴木文史朗の文による)

大蓮華 大蓮華山。白馬岳
の北方にあり。

ジクザグ シツケザツケ。

W. W. Z の字形。

姫川 白馬岳の麓を流る、
松川を合はせ、北流して
糸魚川町の西に於て日本
海に注ぐ。

鈴木文史朗 本名文四郎。
東京外國語學校出身。東
京朝日新聞記者。



おほほぞら

一六 十訓抄選

淀のわたり

俊頼朝臣語りて曰く、白川院、淀に御方違の行幸ありけるに、五月ばかりの事にやありけむ、女房殿上人の舟などあまたありけるに、曉になるほどに、向ひの方に郭公一聲ほのかに鳴きてすぐ、俊頼一首詠ぜまほしくおぼえしに、女房の舟の中に忍びたる聲にて、『淀のわたりのまだ夜ふかきに。』と詠められたりし、時に臨みてめでたかりき。人々感歎して今にわすれず。あたらしくよみたらむにはまされり。』となむいはれける。

香爐峯の雪

一 條院、雪いとおもしろく降りたりける朝、端近く出で居

十訓抄 三卷。作者不詳。舊談・古説の教誡に益あるもの二百五十條を十目の下に収録す。鎌倉時代の中頃(一九二二年頃)出づ。俊頼 大納言源經信の子。金葉集の撰者。淀 京都府久世郡にあり。

淀のわたり云々「いづかたに鳴きて行くらむほととぎす淀のわたりのまだ夜ふかきに」拾遺集

させ給ひて、雪御覽じけるに、「香爐峯のありさまいかならむ。」と仰せられければ、清少納言御前に候ひけるが、申す事はなくて、御簾をおしあげたりける。世の末まで優なる例にいひ傳へられけり。かの香爐峯の事は、白樂天老の後、この山の麓に一の草堂をしめて住みける時の詩に、

遺愛寺、鐘、欵、枕、聽、香爐峯、雪、撥、簾、看。

とあるを、帝仰せ出されけるによりて、御簾をばあげけるなり。かの清少納言は、天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の内、清原元輔の女にて、その家の風吹き傳へたりける上、心ざまわりなく優にて、折につけたるふるまひ、いみじき事多かりけり。

小式部内侍

和泉式部保昌が妻にて丹後に下りける程に、京に歌合ありけるに、小式部内侍歌よみにとられて詠みけるを、定頼中

香爐峯 支那江西省廬山の

一峯。清少納言 歌人清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕へ、才覺あり。

白樂天 名は居易、唐の詩人。

天曆 村上天皇の年號。(一六〇七—一六一六)

梨壺の五人 大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城。

和泉式部 歌人。越前守大江雅致の女。

保昌 藤原氏。膽勇あり、武略に長じ和歌をよくす。長元九年歿、年七十九。

(一六一八—一六九六)

小式部内侍 歌人。父は橋道良、母は和泉式部。

定頼 大納言藤原公任の子。書・和歌に巧なり。寛德二年歿、年五十一。

(一六五五—一七〇五)

納言戯れて、小式部内侍の局にありけるに、「丹後へ遣はしける人は参りたりや、いかに心もとなく思すらむ」といひいれて、局の前を過ぎられけるを、御簾よりなからばかり出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、

大江山 いくのの道の遠ければまだふみも見ず

あまの橋立

とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに、かゝるやうやはある。」とばかりいひて、返歌にも及ばず、袖をひき放ちて逃げられにけり。小式部これより歌よみの世におぼえ出できにけり。これはうちまかせて理運の事なれども、かの卿の心には、これほどの歌、只今詠み出すべしとはしられざりけるにや。

朋友選ぶべし

大江山 京都府天田郡。いくの 幾野。丹後(京都府)の奥地。

或人いはく、人は善き友にあはむことを希ふべきなり。麻の中の蓬は、ためざるに自ら直し。といふたとへあり。蓬は枝さし直からぬ草なり。されども麻に生ひまじりぬれば、ゆがみて行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心のあしき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすが彼此を憚るほどに、自らたゞしくなる心なり。之によりて善き友にあはむことを、經にも説かれ、文にもすゝめたり。顔氏が家訓には、

與善人居如入芝蘭之室久而自芳也。

與惡人居如入鮑魚之肆久而自臭也。

といへり。又或文には、「人の心は水の入物に隨ふが如し。入物細ければ即ち細くなり、入物圓ければ即ち圓くなる。心は朋友にならふ、何ぞ擇ばざるべけむ」とかけり。又九條殿の遺誠

麻の中の云々「蓬生三棘中、不扶自直」(荀子)

經 儒の聖典、四書・五經の類。
顔氏が家訓 二卷、北齊の顔之推の著。

人の心云々「無情水隨器方圆」(白樂天)
九條殿 右大臣藤原師輔。天徳四年歿、年九十三。(一五二八一―一六二〇)

には、「高聲惡狂の人に伴なふ事なかれ。」と教へ給へり。かゝれば、はかなく打語らはむ友なりとも、能くその人を擇ぶべし。薰蕕器を異にすべし。」となり。花のもとに春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは、忘れ難く思ひ出でらるゝものなり。すべて友を語らふには、隔つる心なきを徳とす。ゆめ／＼心悪しからむ人には伴なふべからず。芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき友なりけむ。子猷は、雪の夜、月にあくがれて、遙かに剡縣の安道を尋ね、劉惔は、清風朗月に玄度のなき事を恨みけり。誠に心にかなふ友のなからむには、いかなる興宴も物憂く覺えぬべし。さればこそ梁の孝王は、鄒枚と聞えし二人の臣さりにしかば、兔園の遊をも止め給ひ、魯の仲尼は、子路といひしおもはしき弟子に後れて後には、互にすゝめける

薰蕕云々「類淵曰、薰蕕不同器而藏、蕕桀不共其國而治」(孔子家語)
四人の翁 東園公・夏黃公・角里先生・綺里季。これを商山の四皓といふ。
竹林の七賢 嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎。
子猷 王徽之。子猷は字。晉代の人。風流をもつて名あり。
安道 戴逵。安道は字。晉代の人。博學にして琴・書・畫に巧なり。
劉惔 字は眞長。晉代の人。玄度 許詢の字。晉代の人。風流を以て名あり。
鄒枚 鄒陽と枚乘。共に詩文に長ず。
兔園 梁の孝王の園。
魯の仲尼は云々「孔子哭子路於中庭、有二人叩者」

物をも捨て給ひにけり。清和第九の皇子貞眞親王の作り給へりける、

鄒枚散後平臺靜。空遣春風只斷腸。

文選第二十一、魏文帝與吳質書に曰く、

「昔伯牙絕絃於鍾期。仲尼覆醢於子路。痛知音之難遇。傷門人之無逮。」

堀河院の御時、五月五日、江帥菖蒲を獻りたりける狀に、

進上 水邊菖蒲

千年五月五日

大江爲武

この狀を殿上に出されて、人々に讀めと仰せられけれども、誰もその心を知る人なかりけるを、師賴卿その時弼少將とて侍ひけるが、案じみて詠みたりける。

奉りあぐるかはべのあやめぐさちとせのさつき

いつかたえせむ (古今著聞集)

而夫子拜之。既笑進。使者問之。使者曰。醢之矣。遂命覆醢。(禮記檀弓篇)

平臺 孝王の離宮。

文選 三十一卷。梁太子統が文選樓を築いて諸文人と共に集録したる文集。伯牙・鍾子期 共に周代の音楽家。

江帥 大江匡房。

古今著聞集 二十卷、建長六年橋成季著。神祇・文學・管絃以下三十篇に分ち、種々の説話を集めしもの。

一七 批評論

一、創作と批評

名評の得難き、殆ど名作の得難きに下らず。ハムレットを評する者ゲーテの如きあり。其の批評の至妙なる、マコーレーをして嘆美と絶望とに餘念なからしめたり。然れどもシエイクスピアのゲーテを得る迄は、殆ど二百年を經過せり。夫れ文學及び美術上の創作は、主として構成の作用に屬す。理解の慧眼を以て其の構成の妙處を穿つは、これ批評家の本領とする所なり。

批評家と作家とは頗る其の才能の趣を異にするを以て、一人にして此の兩者の極處に達するは、殆ど望む可からざるの難事なり。古來此の兩種の才能を兼ね具したる者に

ハムレット シエイクスピアの悲劇。"Hamlet"

ゲーテ 第六頁參照。

マコーレー Thomas

Babington Macaulay,

イギリスの歴史家・政治家

家 (1800—1859)

シエイクスピア 第六頁參照。

して、ゲーテ若しくはレッシングの如きは至つて稀なり。彼のバイロンの詩を賦するや、其の音調の爽快なる、其の詞句の有力なる、恰も一種魔術に似たりと雖も、一旦心を潛めて詩文の批評を爲さんとするに當つては、其の言ふこと極めて拙なり。彼の歌ふや天使に似たり。其の考ふるや三歳の童子に等し。夫れ詩才動くが故に詩人歌ふ。然れども必ずしも自ら其の由つて來る所を知らざるなり。詩人は能く美妙を直覺す。之を理解する者は批評家なり。詩人は恰も神明に通ずる者の如く、自ら其の理を解せずして、よく天地の美妙を開き、よく其の眞理を穿つ。詩人の爲に其の理を解する者は批評家なり。詩人は美妙を執つて之を其の作中に宿らしむ。彼固より作中の美妙を知る。然れども必ずしも其の美たる所以を解釋し得るにあらず。之を解釋する者は批評家なり。

レッシング
Gothhold Ephraim
Lessing. エイムの詩人、
批評家。(1729—1781)
バイロン George Gordon
Byron. イギリスの詩人。
(1788—1824)

然らば則ち詩人は天然を解する者、批評家は詩人を解する者と謂ひて可なり。此の詩人と其の批評家との關係は、之を推さば、以て概ね自餘の創作家と其の批評家との關係を知るに足らん。されば批評家は創作家の爲に殿となるの位地にあれども、亦よく之が先驅となるの榮譽を負へり。蓋し名評は名作の後に出づるのみならず、又よく未來の名作を誘引するの力あり。批評は啻に往時を顧みるに止らず、又將來を指揮するの力あり。批評家は己自ら創作せずと雖も、後世の創作家を教へて望ある行路を取らしむることを得。且夫れ文學史上、創作の時代と批評の時代とは、頗る其の趣を異にする所あるを以て、一國の文學若し批評の時代にある時は、創作は敢へて望む可からず。寧ろ之が爲に準備を爲すべし。創作の

時代は招いて直ちに來る者にあらず。其の來るや深く國家百般の情況に因縁す。

彼のエリザベス時代の英國文學に於ける、又彼のゲーテ・シルレル時代の獨逸文學に於ける、其の例古來幾何かある。斯くの如き創作時代の因となり縁となる者、固より一にして足らずと雖も、一般の國民、新鮮の思想を呼吸し、活潑なる精神的運動を始むるに於ては、其の國の文學、望むらくは創作の時代に近からん。此の時に當り、社會に飛奔する種々雑多の思想を判別批評して、其の眞價を明かにし、以て當時の思想界に先だつ者は、蓋し批評家なり。此の時に當り、草を刈り土を反し種子を下して、以て將來の文華を招き來す者は、蓋し批評家なり。將に來らんとする文華の遲速と、其の情態とは大いに之に先だつ所の批評如何に關係す。兩者の相關

シルレル Johann Christoph Friedrich von Schiller. ゲーテと並び稱せられたドイツの劇詩人。(1759—1805)

する所太だ親密なるを知るべし。

ニ、批評の職分

批評の創作に關する所の如何を知れば、其の職分は從つて推知し得らるべし。其の職分は他なし、在る物を在りの儘に見ること是なり。此の事たる、至つて爲し易きが如く見ゆべけれども、一たび深く其の事の眞に何たるかを考ふれば、其の極めて難事なるを認識し得べし。蓋し事物を創作するには一種の才能を要する如く、其の創作の眞相を観るにも、亦一種の才能なかる可からず。事物の相を認識するは、恰も鏡面の物象を受くるが如く、曇なく凹凸なき者にして始めて其の眞相を寫し得べく、智力の發達圓滿、心情の感應宏寬なる者にして始めて其の眞相を認識し得べし。且又事物の眞相は屢、其の表面に出現せず、寧ろ其の内部に埋伏するが

故に、慧眼を有するにあらずば之を發見する能はず。其の眼孔は事物の全面に亙ると共に、其の根柢に達せざる可からず。されば批評家が文學上の創作を品評し、其の真相を明かにし、其の妙處を穿つは、實に爲し難きことと謂ひつべし。

然らば則ち批評家は、如何の作用によりて文學的創作の真相を發見し得るか。今其の作用を分析して二段となし得べし。第一、作家と同感となること、第二、作家の著作を我が有する所の最高の標準に照らすこと、是なり。人常に曰ふ、批評は須らく局外の人に委託すべしと。蓋し其の局に當る者は、動もすれば事の一方に執著して公平の判斷を失ふことあればなり。然れどもこれ唯眞理の半ばをいへるに過ぎず。何となれば、當局者にあらざるよりは、其の事の内實隱微の邊に通じ難く、従つて皮相の見解を下すこと多ければな

り。されば批評家たる者は先づ身を作家の位地に置き、其の考を自ら更に考へ、其の感覺を自ら更に感覺し、全く彼と同感となり、云はば一旦は彼作家と變ぜざる可からず。此の如くにして始めて其の思想と感情との祕密の邊を探り得て、毫も遺憾なきに到るべし。然れども一度身を作家の位地に置きし上は、また翼を撃つて理想の地上に上り、最高の標準に照らして、其の作家の著作に絶對的の批評を下さざる可からず。即ち一度は近づき、一度は遠ざかり、一度は親友、一度は他人とならざる可からず。大自在の心なき者豈これを爲し得んや。啻に心の自在なるのみならず、非凡の智力と感應の力とを具ふる者にあらざれば、文學上最高の標準を發見し、且廣く作家に對して共鳴すること能はざるなり。

三、批評の範圍

上來論じたる所は専ら文學の批評に關すれども、批評なるものは廣く之を解すれば、獨り文學に限るにあらず。美術には美術の批評あり、哲學には哲學の批評あり、創作のある所、批評あらざるなし。且夫れ歴史は一種の批評に外ならず。或は國家の歴史、或は文學の歴史、或は學術の歴史、皆これ既往の事實を批評する者と謂ひて可なり。將に社會に流布せんとする思想あるか、爰に最も缺く可からざるは之が批評なり。其の思想にして若し眞實の價值あらば、宜しく之に印して思想界の貨幣となすべし。而して之に印する者は即ち批評なり。且夫れ批評の職分は、其の批評を下す所の事件に隨ひて多少其の趣を異にすべければ、文學的著作の批評家と、哲學若しくは學術的著作の批評家とは、其の間自ら差別

ありと雖も、其の批評家たるの大體に於ては、上來論じたる所と概ね相違ふことなかるべし。(大西 祝の文による)

一般の人が、今の時世を正しく判断し、それから文明の程度が何の邊にあるかといふことなどをも考へ得ると云ふやうなところまで進み、又個人としては自己の周圍を見あやまることなく、自分の行くべき道を知る力を養つてもらひたいと思ふ。人は眞の批評に導かれて始めて自己を發見し、幾多の性格と精神とを知り、偏見を捨てて正しく進むことが出来る。そこに生の發展ともいふべきものがあると思ふ。

(島崎藤村)

大西 祝 文學博士。探山と號す。明治三十三年歿、年三十六。

島崎藤村 名は春樹。明治五年生。文學者。

一八 恩讐の彼方に

福岡の城下から中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日、宇佐八幡宮に参つて、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。實之助は参拜を終へてから境内の茶店に憩うた。其の時に、ふと彼の傍の百姓體の男が、居合はせた参詣客に、次のやうに話すのを聞いたのである。

「その御出家と云ふのは、元は江戸から來たお人ぢやげな。若い時に人を殺したのを懺悔して、諸人濟度の大願を起したさうぢやが、今云うた樋田（さひだ）の刳貫（くわん）は、此の御出家一人の力で出來たと云うてもよい位ぢや。」

此の話聞いた實之助は、九年此の方未だ感じなかつた

福岡 福岡市。黒田氏五十二萬三千石の舊城下。
中津 大分縣中津市。奥平氏十萬石の舊城下。
彼 中川實之助。
宇佐八幡宮 大分縣宇佐郡にあり。祭神は應神天皇外二柱。

樋田 山國川の下流に臨む一小村。

やうな興奮を覺えた。彼はやゝ焦きこみながら、「率爾ながら少々物を訊ねる。その出家と申すは、年の頃は何程位ぢや。」

と訊いた。その男は自分の談話が武士の注意を惹いた事を光榮であると思つたらしく、

「左様でございますな。私はその御出家を拜んだ事はございませんが、人の噂ではもう六十に近いと申します。」

「丈は高いか、低いかな。」と、實之助は疊みかけて訊いた。

「夫もしかとは判りませぬ。何様洞窟の奥深く居られる故しかとは判りませぬ。」

「その者の俗名は、何と申したか、存せぬか。」

「夫もともと判りませんが、お生れは越後の柏崎で、若い時

柏崎 新潟縣刈羽郡の町。

に江戸へ出られたさうでござります。」と、百姓は答へた。



こゝまで聞いた實之助は躍り上つて欣んだ。彼が江戸を立つ時に親類の一人に、敵は越後柏崎の生れ、故郷へ立廻るかも計りたい。越後は一しほ心を入れて探索せよと云ふ注意を受けて居たのであつた。

實之助はこれぞ正しく宇佐八幡の神託ではあるまいかと勇み立つた。彼はその老僧の名と、山國谿に向ふ道を訊くともはや八つ刻を過ぎて居たにも拘らず、必死の力を雙脚

挿繪 山國川。

山國谿 山國川に沿ふ谿谷。後に頼山陽これを耶馬溪として天下に紹介し、九州有数の名勝となる。山國川は大分縣下毛郡を流るゝ川。

に籠めて、敵の在りかへと急いだ。そしてその日の初更近く、樋田村に着いたのである。彼は直ちに洞窟へ立向はうかと思つたが、焦いてはならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に、焦慮の一夜を明かすと、翌日は早く起出でて、輕装して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に着いた時、彼はそこに石の碎片を運び出して居る石工に訊ねた。「此の洞窟の中に、了海と云はるゝ御出家がおはすさうぢやが、それに相違ないか。」

「おはさないで何としよう。了海様は此の洞の主も同様な方ぢや。はゝはゝ。」

と、石工は心なげに笑つた。實之助は本懐を達する事はや眼前に在りと欣び勇んだ。

了海 俗名青野市九郎。

が彼は周章ててはならぬと思つた。

「して、出入の口はこゝ、一箇所か。」

と訊いた。敵に逃げられてはならぬと思つたからである。

「それは知れた事ぢや。向うへ口を開けるために、了海様は塗炭の苦みを爲さつて居るのぢや。」

と、石工が答へた。

實之助は多年の怨敵が、囊中の鼠の如く目前に置かれてあるのを欣んだ。たとひその下に使はるゝ石工が幾人居ようとも、斬殺すに何の造作もあるべきと勇み立つた。

「其方に少し頼みがある。了海どのに御意得たい爲、遙々と尋ねて参つたものぢやと、傳へてくれ。」

と云つた。石工が洞窟の中へはひつた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は心の裡で、生來初めて廻り逢ふ敵の容

「して、出入の口はこゝ、一箇所か」實之助の問と石工の答との交錯。

貌を想像した。洞門の開鑿の棟梁たてをして居ると云へば、五十は過ぎて居るとは云へ、筋骨たくましく男であらう。殊に若年の頃には、兵法に疎からざりしと云ふのであるから、油断はならぬと思つて居た。

暫くして、實之助の面前へ洞門から出て来た一人の乞食僧があつた。それは出て来ると云ふよりも、墓の如くはひ出て来たると云ふ方が適當であつた。それは人間と云ふよりも、寧ろ人間の殘骸と云ふべきであつた。肉悉く落ちて、骨露はれ、脚の關節以下は處々爛れて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものの、頭髮は長く延びて皺だらけの額を掩うて居た。老僧は灰色を爲した眼をしばたゝきながら、實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、いづれの方とも辨へ兼ねます。」

「人間の殘骸と云ふべきであつた」意外な怨敵

と云つた。

實之助の極度まで張詰めて來た心は、此の老僧を一目見た刹那たゞしくとなつてしまつた。彼は心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を欲して居た。然るに彼の前には、人間とも屍骸ともつかぬ、半死の老僧が蹲まつて居るのである。實之助は失望し始めた自分の心を勵まして、

「そのもとが了海と云はるゝか。」

と息込んで訊いた。

「如何にも左様でござります。して其許は。」

と、老僧は訝しげに實之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を窶すとも、よも忘れは致すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衛を討つて立退いた覚えがあらう。某は三郎兵衛の一子實之助と

「欲して居た」 一字よく全篇と連なる。

中川三郎兵衛 旗本。

申すものぢや。もはや逃れぬ所と覺悟せよ。」

と、實之助の言葉は飽く迄落着いて居たが、其處に一步も許すまじき嚴正さがあつた。

市九郎は實之助の言葉を聽いて、少しも駭かなかつた。

「いかさま、中川様の御子息の實之助様か。いや、お父上を討つて立退いた者、此の了海に相違ござりませぬ。」

と、彼は自分を敵と狙ふ者に逢つたと云ふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へたが、實之助は市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を討つて立退いた非道の汝を討つ爲に、十年近い年月を艱難の裡に過した。こゝで會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ。」

「欺かれてはならぬと思つた」 漸層の一。

市九郎は少しも怯おそびれなかつた。もはや期年の裡に成就すべき大願の成るを見果てずして死ぬことが、稍悲しまれたが、それもおのれが悪業の報であると思ふと、彼は死すべき覺悟を定めたのである。

「實之助様、いざお斬りなされい。お聞及びもなされたらうが、これは了海奴うしなが罪滅しに掘穿たうと存じた洞門でござるが、十九年の歳月を費して、九分迄は竣工致した。了海身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ残すこともござりませぬ。」

と云ひながら、彼は見えぬ目をしばたゝいたのである。實之助は此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懐いて居た憎しみが、何時の間にか消失せて居るのを覺

期年 満一箇年。

えた。敵は父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ抜いて居る。而も自分が一度名乗りかけると、唯々として命を捨てようとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが果して復讐であらうかと、實之助は考へたのである。が、然し此の敵を討たない限りは、多年の放浪を切上げて江戸へ歸るべきよすがはなかつた。まして、家名の再興などは思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は憎悪よりむしろ打算の心から、此の老僧の命を縮めようかと思つた。が、烈しい燃ゆるが如き憎悪を感じずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は消えかゝらうとする憎悪の心を勵ましながら、討ちがひなき敵を討たうとしたのである。

「憎悪の心を勵ましながら」 漸層の二。

工は市九郎の危急を見ると、驚いて彼を庇ひながら、

「了海様を何とするのぢや。」

と、實之助を咎めた。彼等の面には仕宜に依つては許すまじき色があり／＼と見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ、端なくも今日廻り逢うて本懐を達するものぢや。妨げ致すと、餘人なりとも容赦は致さぬぞ。」

と、實之助は凜然と云つたが、その内に石工の數はふえ、行路の人々が幾人となく立止つて、彼等は實之助を取巻きながら、市九郎の身體に一指をも觸れさせまいと、銘々に敦圍き始めた。

「敵を討つ討たぬなどは、それはまだ世に在る内の事ぢや。見らるゝ通り、了海どのは染衣薙髮の身である上に、此の山

國の谿七郷の者にとつては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや。」

と、その中のある者は實之助の敵討を、叶はぬ非望であるかのやうに云ひ張つた。

かう周囲の者から妨げられると、實之助の敵に對する怒は何時の間にか蘇つて居た。彼は武士の意地として、手を拱いて立去るべきではなかつた。

「たとひ沙門の身であらうとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を討つ者を妨げ致す者は、一人も容赦はない。」

と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群衆も皆悉く身構へた。すると、その時に市九郎はしがれた聲を張上げた。

「皆の衆お控へなされい。了海討たるべき覺え十分御座る。」

持地菩薩 釋迦佛の忉利天に上る時、佛のために金・銀・水晶の三階を作りしといふ菩薩。

「敵に對する怒は何時の間にか蘇つて居た」漸層の三。

此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや。」

かう云ひながら、市九郎は身を挺して實之助の傍にゐざり寄らうとした。かねて市九郎の強い意志を知りぬいて居る周囲の人々は、彼の決心を翻すべき由もないのを知つた。市九郎の命は、茲に了るかと思はれた。その時に石工がしがら、が實之助の前に進み出でながら、

「御武家様もお聞及びでもござらうが、此の刳貫は了海様一生の大誓願で、二十年に近い御辛苦に身心を碎かれたのぢや。いかに御自身の悪業とは云へ、大願成就を目前に置きながらお果てなさるゝこと、如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願いは、長くとは申さぬ、此の刳貫の通じ申す間、

了海様のお命を我等に預けては下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、即座に了海様を存分になさりませ。」
と、彼は誠を表はして哀願した。群集は口々に、「ことわりぢや〜。」と賛成した。

實之助もさう云はれて見ると、その哀願を聴かぬ譯には行かなかつた。今此處で仇を討たうとして、群集の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待たならば、今でさへ自ら進んで討たれようと云ふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とはいひながら、此の老僧の大誓願を遂げさせてやるのも、決して不快なことではなかつた。實之助は市九郎と群集とを等分に見ながら、

「その哀願を聴かぬ譯には行かなかつた」
反漸層の一。

「了海の僧形にめでて、その願許して取らさう。つがへた言葉
を忘れまいぞ。」

と叫んだ。

「念もないことで御座る。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の
刳貫が向う側へ通じた節は、その場を去らず了海様を討た
せ申さう。それ迄はゆる／＼と、此の邊りに御滞在なされま
せ。」

と、石工がしらは穩かな口調で云つた。

市九郎は此の紛擾が無事に解決が付くと、それに依つて
徒費した時間が如何にも惜しまれるやうに、にじりながら
洞窟の中へ這入つて行つた。

實之助は大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し
得られなかつた事を憤つた。彼は如何ともし難い鬱憤を抑

「鬱憤を抑へながら」
反漸層の二。

へながら、石工の一人に案内せられて木小屋の裡へ入つた。

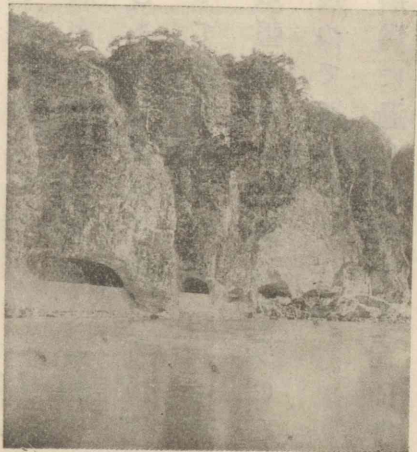
自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討ち
得なかつた自分の腑がひなさを、無念と思はずには居られ
なかつた。彼の心は何時の間にか焦立たしい憤りで一杯に
なつて居た。彼はもう刳貫の竣成を待つと云ふやうな、敵に
對する緩かな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟
の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立退かうと云ふ決心の
臍を固めた。が、實之助が市九郎の張番をして居るやうに、石
工達は實之助をそれとなく見張つて居た。

「決心の臍を固めた」
反漸層の三。

最初の二三日を心にもなく無爲に過したが、丁度五日目
の晩であつた。毎夜のことなので石工達も警戒の眼を緩め
たと見え、丑近い頃には何人も深い眠に入つて居た。實之助
は今宵こそと思ひ立つた。彼はがばと起上ると、枕元の一刃

を引寄せて、靜かに木小屋の外に出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れて居たが、かうした周圍の風物には眼もくれず、實之助は足を忍ばせて竊かに洞門に近づいた。削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。

洞窟の中は入口から来る月光と、所々に剝りあけられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探りく、奥へくと進んだ。



挿繪 青の洞門。

入口から二町許りも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、く

わつ、くわつと、間を置いて響いて来る音を耳にした。彼は最初それが何であるか判らなかつた。が、一步進むに従つて、その音は擴大して行つて、おしまひには洞窟の中の夜の寂靜の裡にこだまするまでになつた。それは明かに岩壁に向つて鐵槌を下す音に相違なかつた。實之助はその悲壯な凄みを帯びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに従つて、玉を打碎くやうな鋭い音は洞窟の周圍にこだまして、實之助の聽覺を猛然と襲つて来るのであつた。彼は此の音をたよりに這ひながら近づいて行つた。此の槌の音の主こそ敵了海に相違あるまいと思つた。私かに一刀の鯉口を寛げながら、息を潛めて寄添うた。その時ふと彼は槌の音の間々に、囁くが如く、うめくが如く、了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

「自分の胸が烈しく打たれるのを感じた」
反漸層の四。

そのしはがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鐵槌を振つて居る了海の姿が、墨の如き闇にあつて、尙、實之助の心眼に歷々として映つて來た。それはもはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、ただ、鐵槌を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと自分自身を顧みた。既に佛心を得て、衆生の爲に碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて、引剥ひはぎの如く獸の如く、瞋恚の劍を抜きそばめて近寄らうとする自分を顧みると、彼は強い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた。

洞窟をゆるがせる力強い槌の音と、悲壯な念佛の聲とは、

「強い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた」
反漸層の五。

實之助の心を散々に打碎いてしまつた。彼は潔く竣功の日を待ち、彼との約束の果さるゝのを待つより外はないと思つた。

實之助は深い感激を懷きながら、洞外の月光を目指して洞窟の外に這出たのである。

その事があつてから、實之助は洞窟の外の木小屋の内に朝夕を送りながら、心靜かに刳貫の成就されるのを待つて居た。彼はもう老僧を討つて立退かうと云ふやうな儉しい心は、少しも持つて居なかつた。了海が逃げも隠れもせぬ事を知ると、彼は好意を以て了海がその一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つて居た。

彼一人が爲すこともなく暮して居るにも拘らず、周圍の石工達は寸陰をも惜しんで懸命に働いて居た。了海の不斷

「一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つて居た」
反漸層の六。

の精神が何時の間にか石工達の心にも浸渡つて居るやうであつた。

彼等は實之助に對して、朝夕快い挨拶を送つた。

「お武家様、今日は何處へおはせられた。」

などと、問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつて居た。周圍の人々が凡て狂氣のやうに働いて居る中に、自分一人漠然と暮して居る事が、彼に心苦しう思はれ始めた。二月もかうして漠然と暮して居る内に、彼はふと思ひ付いた。かうして爲す事もなく待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡くすことに依つて、幾何でも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に復讐の期日が縮められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から、石工の群に伍して槌を振り始めた

「槌を振り始めた」
反漸層の七。

のである。

かうして、敵と敵とが相並んで槌を下し始めたのである。實之助は本懐を達する日が一日も早かれと懸命に槌を振ふのであつた。了海は實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう。彼は又更に精進の勇を振つて狂人のやうに岩壁を砕いて行くのであつた。

そのうちに月が去り、月が來た。最初は自分自身の爲に槌を振つて居た實之助も、此の剗貫の大業を爲しがひのある仕事であると思ふやうになつて居た。阿修羅の如く槌を振つて居る了海の姿を見て居ると、彼はその勇猛心に動かされて、ともすれば讐敵の恨を忘れがちであつた。

石工どもが晝の疲れを休めて居る眞夜中にも、此の敵同

阿修羅 佛法を妨げんとし
たる魔王。

志は相並んで黙々として槌を振つて居た。

それは了海が樋田の岩壁に第一の槌を下してから了度二十一年目、實之助が了海に廻り逢うてから一年六ヶ月を経た延享三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは悉く小屋に退いて、了海と實之助のみが、終日の疲勞にめげず、懸命に槌を振つて居た。その夜九つに近い頃であつた。了海が力を籠めて振下した槌が、朽木を打つが如く何の手答もなく、力餘つて槌を持つた右の掌が岩に當つたので、彼は「あつ」と思はず聲を上げた。その時であつた、了海の朦朧たる老眼にも紛れなく、その槌に破られた小さい穴から、月の光に照らされた山國川の姿が歴々と映つたのである。了海は「おう」と全身を顫はせるやうな、名狀しがたき叫聲を擧げたかと思ふと、それにつゞいて狂したかと思はれるやうな歡

延享三年 紀元二四〇六年。櫻町天皇の御代。九代將軍徳川家重の時。

喜の泣笑ひが、洞窟を物凄く揺動かしたのである。

「實之助殿御覽なされい。二十一年の大誓願、今宵端なくも成就いたしました。」

かう云ひながら、了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒ずんだ土の見えるのは岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を執り合うて大歡喜の涙に咽んだのである。が、暫くすると了海は身を退つて、

「大歡喜の涙」

「いざ實之助殿、約束の日ぢや、お斬りなされい。かゝる法悦の最中に往生致すなれば、未來は淨土に生るゝこと必定疑なしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工どもが妨げを致さう。いざお斬りなされい。」
と、彼のしはがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助

は了海の前に手を拱いて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧出づる歡喜に泣く凋びた老僧の顔を見て居ると彼を敵として殺す事などは思ひ及ばぬ事であつた。敵を討つなどと云ふ心よりも、此の羸かよほい人間の腕に依つて成しとげられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はゐざり寄りながら再び老僧の手を執つた。二人は其處に凡てを忘れて感激の涙に何時迄も浸つて居たのであつた。(菊池寛の文による)

「感激の涙」

菊池 寛 明治二十二年生
る、文學者。

〔終〕

一 抒情的文學

長歌・短歌・連歌・俳諧
俳句・新體詩等

古 事

記 [有朋堂文庫]、[日本古典全集]、[國史大系]
[日本文學大系]

古事記傳(本居宣長)。古事記新講(次田潤)。

萬 葉

集 [國歌大觀]、[有朋堂文庫]、[國歌大系]

萬葉集抄(仙覺)。萬葉代匠記(契沖)。萬葉考(賀茂眞淵)。萬葉集略解(橘千蔭)。萬葉集古義(鹿持雅澄)。萬葉集美夫君志(木村正辭)。校本萬葉集(佐々木信綱等)。萬葉集新考(井上通泰)。口譯萬葉集(折口信夫)。萬葉集新解(武田祐吉)。

菅 根

集 [續日本歌學全書]

漫 吟

集 [國歌大系]

賀茂翁 家集 [有朋堂文庫]

鈴 屋

集 [國歌大系]

良 寛 歌

集 [同右]

近世長歌今様全集 [續日本歌學全書]

古 事 記

[前出]

萬 葉 集

[前出]

古今和歌集 [國歌大觀]、[國歌大系]

古今餘材抄(契沖)。古今集打聽(眞淵)。古今和歌集講義(眞淵)。古今集遠鏡(宣長)。古今和歌集評釋(金子元臣)。

後撰和歌集 [國歌大觀]、[國歌大系]

拾遺和歌集 [國歌大觀]、[國歌大系]

後拾遺和歌集 [同右]

金葉和歌集 [同右]

詞花和歌集 [同右]

千載和歌集 [同右]

新古今和歌集 [同右]

新古今和歌集抄(東常縁)。新古今集美濃の家苞(宣長)。新古今和歌集詳解(鹽井正男)。新古今和歌集遠鏡(尾上柴舟)。

新勅撰和歌集 [同右]

續後撰和歌集 [同右]

續古今和歌集 [同右]

續拾遺和歌集 [同右]

新後撰和歌集 [同右]

玉葉和歌集 [同右]

續千載和歌集 [同右]

續後拾遺和歌集 [同右]

風雅和歌集 [同右]

新千載和歌集 [同右]

新拾遺和歌集 [同右]

新後拾遺和歌集 [同右]

新續古今和歌集 [同右]

新葉和歌集〔國歌大觀(國歌大系)
 林葉累塵集〔契沖全集〕
 和歌鳥の跡〔戸田茂睡全集〕
 恰野集
 鯁玉集
 近代諸家集〔國歌大系(自第十五卷至第十九卷)〕
 近世名家家集〔續日本歌學全書〕
 近代名家歌選〔校註和歌叢書〕
 明治初期諸家集〔國歌大系〕
 明治名家家集〔續日本歌學全書〕
 歌集明治より昭和へ〔外山且正〕。
 明治歌集〔佐々木信綱〕。
 大正一萬歌集〔尾山篤二郎〕
 古今夷曲集〔有朋堂文庫〕
 萬載狂歌集〔同右〕
 德和歌後萬載集〔同右〕
 狂歌才藏集〔名著文庫〕

金葉集
 菟玖波集
 新菟玖波集
 新撰犬筑波集〔俳諧文庫〕
 守武千句〔同右〕
 紅梅千句〔俳書大系〕
 花月千句〔同右〕
 犬子集〔同右〕
 談林十百韻〔同右〕
 虛栗集〔同右〕
 芭蕉七部集〔俳諧文庫(俳書大系)〕
 其袋〔同右〕
 蕪村七部集〔同右〕
 名家俳句集〔有朋堂文庫〕
 名家俳句集〔俳書大系〕
 近世俳諧名家集〔俳諧叢書〕
 明治一萬句〔今井柏浦〕
 大正一萬句〔今井柏浦〕
 俳諧註釋集〔俳諧叢書〕。俳諧七部集新釋〔岩本梓石〕。評註俳句選〔沼波瓊音〕。芭蕉句選講話〔同上〕。芭蕉句選略解〔井泉水〕。芭蕉連句選釋〔同上〕。

古事記
 萬葉集
 拾遺集〔前出〕

俳風柳多留〔近代日本文學大系〕
 俳諧武玉川〔同右〕
 俳風柳樽拾遺〔同右〕
 時代川柳大觀〔森田鶴東〕
 新川柳大觀〔川上三太郎〕
 俳風柳檢通釋〔武笠三〕。古川柳評釋〔坂井久良岐等〕。

〔詩集〕 新體詩鈔(外山正一等)。新體詩歌集(上田萬年等)。
 現代日本詩集(改造社)日本文學全集第三十七篇。
 現代詩人選集。
 〔研究〕 新體詩史(福井久藏)。明治大正詩史(日夏耿之助)。

二 思惟的文學

紀行・日記・隨筆・評論等

土佐日記〔日本文學大系(國文叢書)(有朋堂文庫)〕
 土佐日記考證(岸本由豆流)。土佐日記講義(三木五百枝)。校註土佐日記(鳥野幸次)。
 和泉式部日記〔同右〕
 新釋和泉式部日記(與謝野晶子)。
 紫式部日記〔同右〕
 紫式部日記解(足立稻直)。紫式部日記講義(三木五百枝)。紫

式部日記精解(關根正直)。
 更級日記〔同右〕
 更科日記略解(關根正直)。校註更科日記(佐々木信綱)。更級日記新註(玉井幸助)。
 讚岐典侍日記〔日本文學全集(有朋堂文庫)〕
 *枕草子〔日本文學大系(國文叢書)(有朋堂文庫)〕
 枕草子春曙抄(季吟)。枕草子評釋(金子元臣)。枕草子新解(鳥野幸次)。
 海道紀行〔有朋堂文庫(日本文學大系)〕
 東關紀行詳解(鳥野幸次)。標註東關紀行(大町桂月)。新譯東關紀行精解(吉川秀雄)。
 十六夜日記〔同右〕
 十六夜日記標註(佐々木信綱)。新釋十六夜日記精解(吉川秀雄)。
 辨內侍日記〔日本文學全集〕
 中務内侍日記〔日本文學全集(有朋堂文庫)〕
 *方丈記〔日本文學大系(國文叢書)(有朋堂文庫)〕
 講本方丈記(玉井幸助)。
 十訓抄〔日本文學大系(國文叢書)〕
 十訓抄詳解(石橋尚寶)。
 *徒然草〔日本文學大系(國文叢書)(有朋堂文庫)〕

徒然草文段抄(季吟)。徒然草諸抄大成(淺香久敬)。徒然草詳解(内海弘藏)。徒然草講話(沼波瓊音)。徒然草解釋(塚本哲三)。

* 神皇正統記 [日本文學大系] [有朋堂文庫] [國文叢書]
校訂神皇正統記(飯田武郷等)。神皇正統記評釋(大町桂月)。
神皇正統記講義(芳賀矢一)。

野ざらし紀行 [俳諧文庫] [有朋堂文庫]

野ざらし紀行評釋(萩原井泉水)。

鹿島紀行 [俳諧文庫]

笈の小文 [俳諧文庫]

更科紀行 [俳諧文庫] [俳書大系]

* 奥の細道 [有朋堂文庫] [俳諧文庫]

奥の細道新釋(沼波瓊音)。校註奥の細道(鳥野幸次)。新釋奥の細道(木村架空)。奥の細道新研究(藪虎亮)。奥の細道詳請(岩田九郎)。

鶉衣 [同右]

鶉衣評釋(佐々政一)。校定註釋鶉衣(石田元季)。

風俗文選 [同右]

校註風俗文選註釋(藤井乙男)。

おらが春 [俳諧文庫] [俳書大系]

岡部日記 [有朋堂文庫] [賀茂眞淵全集]

後の岡部日記 [同右]

菅笠日記 [有朋堂文庫] [本居宣長集]

西遊記・東遊記 [有朋堂文庫]

* 折焚く柴の記 [新井白石全集]

校註折たく柴の記(佐藤仁之助)。

標註折たく柴の記(内藤恥斐)。

文訓・樂訓 [益軒全集] [有朋堂文庫]

駿臺雜誌 [有朋堂文庫]

雲萍雜誌 [同右]

常山紀談 [同右]

* 玉勝間 [本居宣長全集]

口譯註解玉かづま(袖利淳一)。

梧窓漫筆 [有朋堂文庫]

* 花月草紙 [同右]

花月草紙新釋(佐野保太郎等)。花月草紙詳解(坪内孝)。

——(以下卷八・附録に續く)——



大正十三年十月三十日 發
大正十四年二月九日 訂正再版發行
昭和五年九月二十六日 第二版印刷
昭和五年九月二十九日 第二版發行
昭和六年一月二十八日 第二版訂正再版印刷
昭和六年二月一日 第二版訂正再版發行

女子國文新編(第二版)全十冊 附
卷八 定價 各 金六拾錢

著 者 者 松 三
作 者 者 垣 内
印 發 者 者 文 學 社
刷 行 者 者 小 林 竹 雄
所 者 者 文 成 社



發 兌

東京市神田區美土代町二丁目一番地
電話 三三五八番
口座 東京三八七八番

株式會社 文學社

關西一手販賣所

大阪市西區靱北通り二丁目
電話 七五四三番
口座 大阪七五四三番

株式會社 盛文館

